

#### (4) 讃岐国府跡調査事業 調査成果の概要

遺跡名	讃岐国府跡
調査主体	香川県教育委員会
調査担当	香川県埋蔵文化財センター
調査期間	令和3年11月1日～令和4年2月28日
調査面積	141㎡
出土遺物	コンテナ数 5箱 (土器・石器)



第18図 遺跡位置図 (1/25,000)

#### 調査の概要

今年度の讃岐国府跡調査事業は、周知の包蔵地「讃岐国府跡」の西側外縁部(第18図)で調査を実施した。

この地点は、北と南を東西に延びる丘陵に挟まれた広く浅い谷筋の中に位置し、令和元年度の調査地(37次)の南側を通る、南海道の可能性が指摘されている「セイリユウ」と呼ばれる東西道路を西に延長した先に相当する。この「セイリユウ」という道に関しては、昭和53年度に行われた5次調査で、鼓岡神社の乗る丘陵裾を段状にカットした痕跡が見つかっており、それにより生じた平坦面が丘陵裾を切り通した道路遺構であると想定されている。この道路遺構が西側へ延伸する可能性の確認と合わせ、既往の発掘調査事例が無い西側外縁部における国府関連遺構の広がりについて確認するため、対象地内に3カ所のトレンチを設定して調査を行った。



写真30 調査地全景(東から)

#### (1) 近世(第19図)

39-1 トレンチでは、北半部に耕作に伴うと考えられる鋤溝状遺構群(写真31)を確認した。

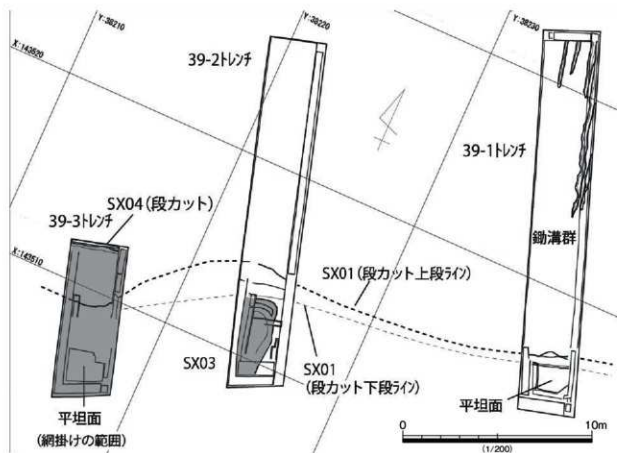
39-2 トレンチでは北半部に遺構は認められず、地形も平坦になっていることから後世に削平を受けたと考えられる。

両トレンチ共に、南端で近世(18世紀代)に埋められた、比高差約0.7m以上の地山の切り下げによる切り通し状遺構(SX01)を確認した。切り通し状遺構の下は平坦(平坦面1)で、この面は層厚約15cmの近世包含層上に形成される(写真32・33)。39-2 トレンチではこの土を掘り込んだ大型の落ち込みSX03(写真34)を確認した。埋土中に17世紀代の遺物を含む。



写真31 鋤溝状遺構群全景(南から)

39-3 トレンチではトレンチ北端に約0.3mの地山の切り下げSX04(写真35)と平坦面があり、近世



第19図 近世遺構配置図 (1/200)



写真32 39-1 トレンチ SX01 (西から)



写真33 39-2 トレンチ SX01 (西から)

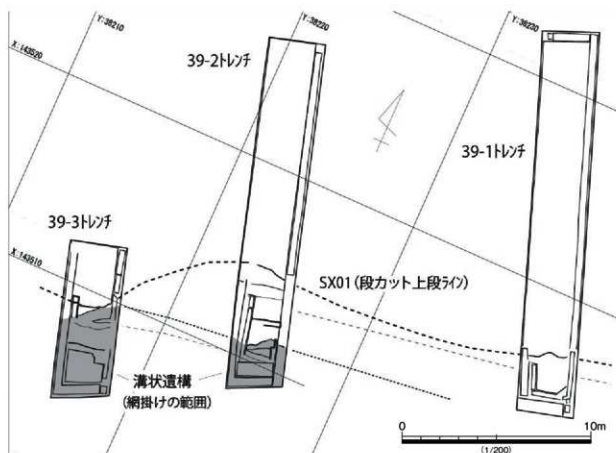


写真34 39-2 トレンチ SX03 (北東から)



写真35 39-3 トレンチ SX04 (▽部分.南から)

の遺物を含む耕作面が形成される。この耕作面の下には緩やかな凹地が認められる。最深約0.5mを測り、埋土の中にわずかではあるが17世紀代の陶器が含まれており、堆積の状況から、この頃に埋め立てを受けたと考えられる。



第20図 中世遺構配置図 (1/200)

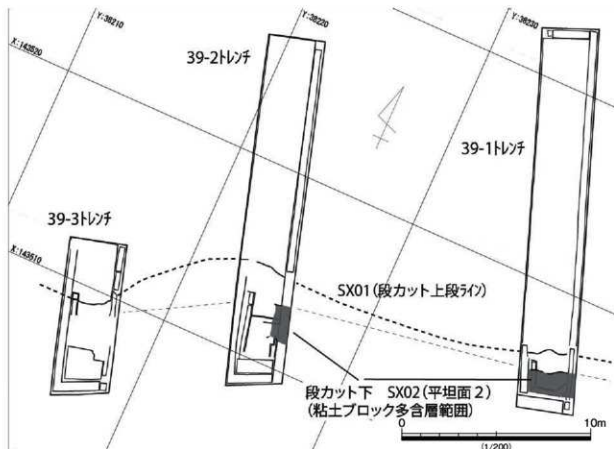
(2) 中世 (第20図)

39-1 トレンチでは明確な当該期の遺構は確認できなかった。39-2 トレンチでは平坦面1を除去した下で、南端部に幅約1m、深さ約0.6mの落ち込み(写真36)を確認した。埋土は砂混じりの粘質土で、中には13～14世紀に焼かれた土器の破片を含み、当該期に堆積したものと考えられる。一部、砂質土の堆積が認められ、流水の痕跡があることから溝状遺構であると考えられる。

39-3 トレンチでは、近世の凹地とはほぼ同じ位置に最深約1mを測る落ち込みを確認した。埋土に部分的に砂層を挟んでおり、流滞水を繰り返して埋没した溝状遺構であると判断した。埋土中に13～14世紀代の遺物を多く含み、39-2 トレンチの落ち込みと時期が類似しており、同時期に存在したものと考えられる。また、この落ち込みは砂質土・粘質土からなる地山層を切り込むが、切り込んだ勾配が39-1・2 トレンチのSX01と類似しており、同一のものである可能性が想定できる。この場合、SX01は中世以前に切り下げられた遺構であるこ



写真36 39-2 トレンチ溝状遺構 (西から)



第 21 図 中世以前遺構配置図 (1/200)



写真 37 39-2 トレンチ SX02 (北から)  
(白線内 推定遺構残存範囲)



写真 38 39-1 トレンチ SX02 (西から)  
(白線より右 推定遺構残存範囲)

とになる。

(3) 中世以前 (第 21 図)

各トレンチとも明確な遺構は確認できない。39-2 トレンチでは SX01 の下に平坦面 (平坦面 2 (SX02) 写真 37) が認められる。SX03 により大半が削平されているほか、中世の溝状遺構の埋土に一部覆われる。

SX02 は地山との間に、溝状遺構埋土とは異なる粘土の小粒を多く含む土が薄く残存しており、中世以前に形成された人為堆積層の可能性があると考えている。同様のものが 39-1 トレンチの SX02 (写真 38) でも確認できており、こちらも中世以前に形成された可能性を残すが、明確な遺物を含まないため、正確な時期については不明である。共に平坦面直上では水成堆積層が確認できないことから、中

世の溝状遺構の埋土とは異なると考えられる。39-3 トレンチではSX02に相当する平坦面は確認できなかった。しかし、SX01に類似した切り下げが認められ、13～14世紀代の溝状遺構埋土で覆われる状況から、それ以前の遺構である可能性が高い。

なお、39-2・3 トレンチを中心に、中世の溝状遺構並びにSX01の埋立土中から8世紀～12世紀代の遺物が少量出土している。

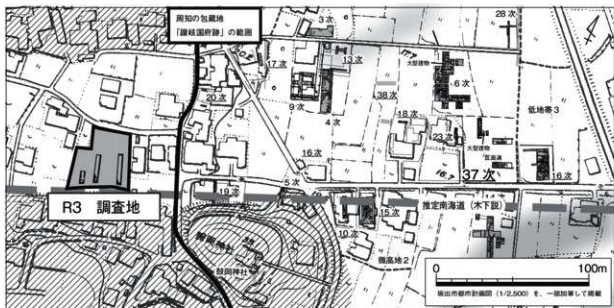
#### (4) 調査のまとめ

今回の調査では明確に古代に遡る遺構は確認できなかったが、先述したように、8世紀～12世紀の遺物が少量出土していることから、調査地西側を中心に当該期の遺構が存在する可能性が想定できる。

また、SX01・SX02については、5次調査で確認された地形のカット面に類似し、中世の溝状遺構との関係から少なくとも中世前半までには形成されていると考えられる。形状の類似性から道路遺構の可能性も考えられるが、残存している範囲が狭小であるほか、他地域の調査で見つかった道路遺構のような側溝の掘削や路盤や路面の形成に伴う遺構が認められないため、道路遺構と断定するには至らなかった。

なお、これまでの調査で讃岐国府城では11世紀中葉に大型建物群が廃絶し、13世紀にかけて井戸や多量の柱穴群からなる屋敷地へ変質したことがわかっているが、SX02を中世前半に削削した溝状遺構は、急速に耕地化が進む過程で灌漑施設として開削されたものと考えられる。讃岐国府では既往の発掘調査成果から13世紀末以降、遺構・遺物が激減し、その機能が急速に縮小若しくは停止したと考えられているが、この溝状遺構からの出土遺物が13～14世紀のものを主体とすることから、それを裏付けると言える。その後、溝状遺構は埋積し、凹地化してゆくが、この凹地が近世に耕作地として使用され、さらに、近世後半期にはSX01を埋め立てて上面の耕作地の範囲を広げるといった土地利用の変遷をうかがう資料が得られた。

今後、引き続き「讃岐国府跡」の構造や範囲の確認を進める中で、今回明確にできなかった道路遺構の存在及び施設の有無について、将来的に、今回の調査対象地周辺において改めて調査し、明確にすることも課題の一つとして考えておきたい。



第22図 調査区位置図 (1/2,500)

#### 4 地域総合調査研究事業の成果

香川県内の一定範囲の地域を対象として、埋蔵文化財を悉皆的・総合的に把握し、その上で他の文化財や歴史的所見を加えることで、地域の成り立ちと変遷過程をとらえ直すとともに、これらの作業を通して、得られた知見と成果を地域に還元し共有するほか、これらの知見と成果は、今後県内の各自治体で作成する「文化財保存活用地域計画」のモデルケースとして提示することを目的とした事業である。

事業期間は令和3年度～令和5年度の3か年で、直島町教育委員会と協同で事業にあたるほか、歴史・民俗の分野において、香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館の協力を得た。対象地域は直島町全域である。主たる事業内容は、①地形状況の把握、採集資料の図化や検討、海揚がり資料の調査などを伴う埋蔵文化財詳細分布調査（直島本島以外の島を含む）、②当該年度の調査成果を報告するとともに、既往の調査等で得られた資料について一定期間展示する場を設け、調査成果を町民対象に周知する場としての調査報告会及び資料展示会の実施である。

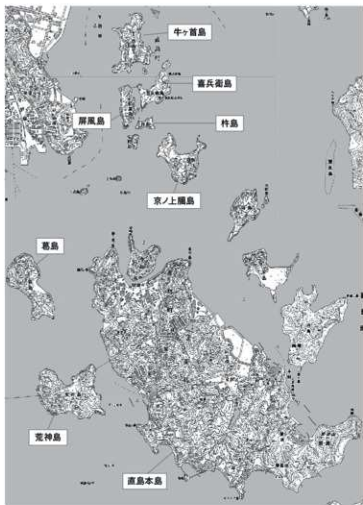
##### 分布調査の概要

先に述べた通り、直島本島並びに群島部において、周知の埋蔵文化財包蔵地の現状を把握すると共に、

未知の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するため、遺構・遺物の分布把握および資料の採取、地形状況の把握などを伴う現地踏査を行った。令和3年度は、牛ヶ首島・喜兵衛島・屏風島・杵島・京ノ上臈島・葛島・荒神島・直島本島を対象とした。

各島とも、下草の繁茂などにより丘陵部上の遺跡については確認困難なものが多く、海岸部に主眼をおいて踏査したが、以前実施された分布調査により記録された内容から大きく変化するところがあることを確認したほか、京ノ上臈島の東海岸で新たな遺物の散布地が確認できた。また、荒神島遺跡では祭祀遺構の遺物出土状況の測量と主要な遺物の採取を行うなど、周知の埋蔵文化財包蔵地の補足記録も行き、遺跡台帳の内容拡充に努めた。そして、これらの踏査で得られた遺物及び、既往の調査などで直島町が保管している遺物については、図化・写真撮影などによる記録化に努めた。

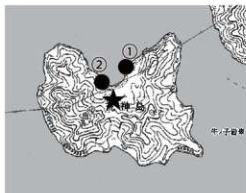
以下に、成果の一部を掲載する。



第23図 令和3年度踏査対象地位置図

### 荒神島遺跡

第24図②の地点で祭祀遺跡として確認された遺跡であるが、★印でも古墳時代を中心とした遺物の散布を確認。既に存在が知られていた場所であるが、遺跡台帳に反映されていないことから、記録を行った。7群からなる遺物集中部が地表面に分布している。遺物は須恵器甕を主体とし、土師器も少量確認できる。②同様、祭祀関連の遺物であると考えられ、遺跡の地点を追加登録した。なお、周辺は雨水の浸食が著しく、遺物の散逸が懸念され、測量時に代表的な遺物について、位置の記録をしながら取り上げを行った。



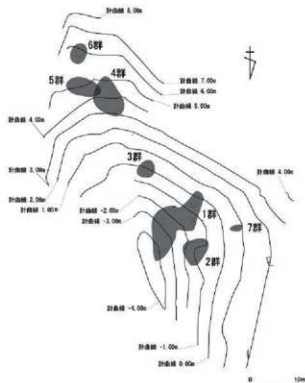
第24図 荒神島調査地点位置図  
①荒神島古墳、②荒神島遺跡、  
★荒神島遺跡範囲変更箇所



写真39 荒神島祭祀遺跡  
1群遺物出土状況近景（北から）



写真40 荒神島祭祀遺跡全景（北から）



第25図 荒神島祭祀遺跡測量図（1/800）  
北は略北。等高線は任意の点を基準に  
1m間隔で作成



写真41 直島本島南東部の海岸踏査風景  
（北から）





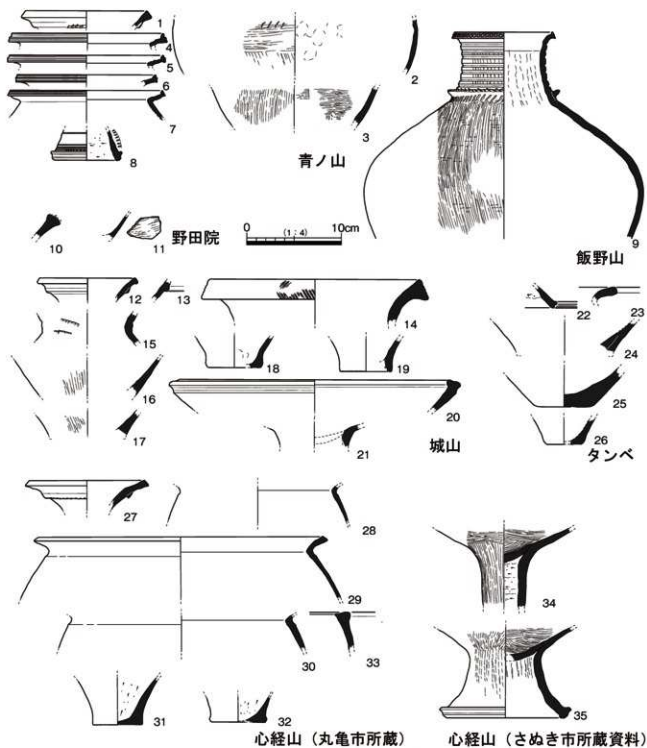


図2 高地性集落出土資料1

1 各高地性集落の土器

(1) 青ノ山 (図2-1~8)

丸亀平野北東部の青ノ山(標高224m)山頂に所在する古墳時代後期の青ノ山8号墳の調査に伴って弥生土器が出土している<sup>(註6)</sup>。

1は細頸壺の口縁部片であり、外面の口縁部下

に刻目を1条の貼付突帯がみられる。2、3は壺胴部片であり、2の外面の胴部最大径付近には貝殻腹縁による列点文がみられる。

4~7は甕の口縁部片であり、強い横ナデと上方に拡張された口縁端部外面に凹線文が施される。8は高杯の脚部片で、脚部外面は列点文と横

位の沈線が加飾される。

青ノ山山頂出土資料の帰属時期は、1のみ中期Ⅱ-2期に遡る可能性があるが、他の資料は中期Ⅲ-1期にまとまる。

### (2) 飯野山 (図2-9)

丸亀平野北東部に所在する飯野山 (標高 422 m) 山頂から弥生土器が採取されている<sup>(註7)</sup>。9は大型の長頸壺で、胴部最大径より上位が残存する。上下に拡張される口縁端部外面に竹管文、頸部外面に7条の凹線文を施し、頸胴部界に刻目をもつ貼付突帯を1条付与する。胴部外面の縦ミガキの下位には僅かながら平行タタキが確認できる。

長頸壺は後期初頭以後に確認される器種であり、頸部外面の凹線文に伴う横ナデの簡略化がみられるが、口縁部形態から判断して、中期Ⅲ-3期に比定される。

### (3) 大麻山<野田院> (図2-10・11)

丸亀平野南西部に所在する大麻山 (616 m) の西側斜面の標高 463m 付近に平坦地があり、古墳時代前期の積石墳や古代から中世の山林寺院が立地し、「野田院」と呼ばれている<sup>(註8)</sup>。厳密には山頂立地ではないものの、これに準じた高所立地と捉えて差し支えない。野田院古墳の整備事業に伴う発掘調査の出土品の中に、5点の弥生土器片を確認し、その内、2点を図化した<sup>(註9)</sup>。

10は短頸広口壺の口縁部であり、口縁端部に僅かに凹線文が確認できる。11は壺底部片であり、外面に縦ミガキ、内面は摩滅が進む。薄手の器壁厚からみて、中型壺の底部片と考えられる。

大麻山出土土器の帰属時期は、10の短頸広口壺の形態や11の広口壺の器壁厚から判断して、中期Ⅲ-1～Ⅲ-2期に比定できる。

### (4) 城山 (図2-12～21)

城山は、五色台とともに香川県中部の丸亀平野と東部の高松平野を画する山塊の一つである。山

上部が讃岐岩質安山岩に覆われる開折溶岩台地 (メサ) であり、台形の山容をもつ。山上部は比較的平坦となり古代山城の城山城の城壁が巡るが、南寄りに山頂 (標高 462 m) が所在しており、弥生土器・石器の考古資料が採取されている<sup>(註10)</sup>。

12・13は細頸壺の口縁部片で、口縁部からやや下がった位置に貼付突帯を施す。13は小片のため、突帯上の刻目の有無が判断できない。14は広口壺の口縁部であり、肉厚の口縁端部外面に、ハケ原体押捺による綾杉文をもつ。15は壺頸部片であり、傾いたハケ原体による列点文を施す。16・17は壺底部片。18・19は壺底部片であり、内面が突状となる細身の形態をもち、内面の調整にケズリは確認できない。20は台付鉢の口縁部であり、口縁端部下には1条の凹線文が確認できる。21は円盤充填が剥離した台付鉢の鉢から脚部の境界付近の破片である。

城山山頂出土土器は、形態や調整からみて凹線文発達以前の中期Ⅱ-1～2期を中心とする。

### (5) 北峰<タンベ> (図2-22～26)

五色台は、白峰山や大平山など複数の支峰をもつ開折溶岩台地 (メサ) の総称であり、この中でも北峰 (標高 389 m) は北部の支峰の一つである。北峰付近には、文政元 (1818) 年の築造とされる溜池のタンベ池があり、弥生土器・石器が採集されている<sup>(註11)</sup>。

22は高杯脚部片。1条の凹線文がみられる脚端部拡張は顕著ではなく、内面ケズリが確認できる。23は壺口縁部片であり、口縁端部に凹線文や跳ね上げはみられない。24・25は壺底部片。25は丸味を帯びた厚手の底部となる。26は壺底部片で、内面は摩滅し、調整を確認することができない。

タンベ出土土器は、壺口縁 (23) や同底部 (26)、壺底部 (25) の形態、高杯脚部片 (22) の形態や施文状況からみて、中期Ⅱ-1～Ⅲ-1期に比定することができる。

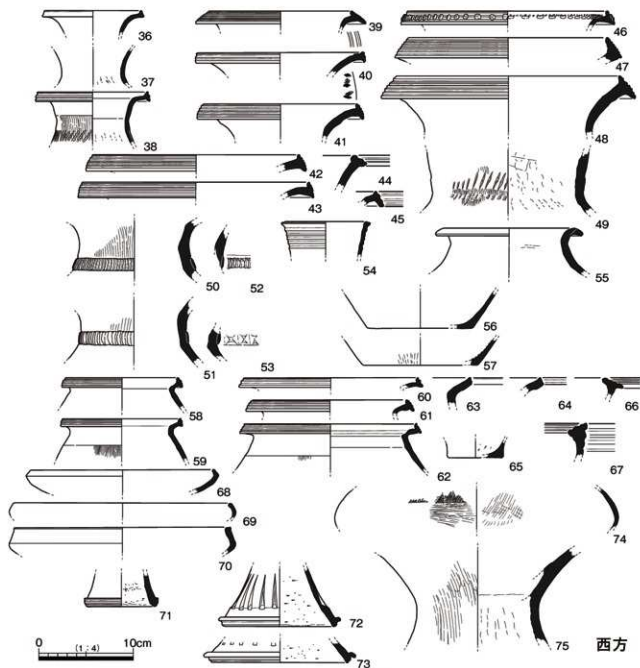


図3 高地性集落出土資料2

(6) 心経山 (図2-27～35)

心経山は、備讃瀬戸西部の塩飽諸島の一つである広島西部の山塊であり、山頂（標高約190m）から東へ続く稜線上の数地点から遺物が確認されている<sup>(註12)</sup>。また、心経山については、既往の報告<sup>(註13)</sup>が存在するが、現状で資料は所在不明となっているため、ここでは実物確認可能な資料<sup>(註14)</sup>について先に触れておく。

27は細頸壺の口縁部。外側に大きく開く口縁部下に1条の貼付突帯をもつ。28～30は甕であり、29は跳ね上げとなる口縁や頸部に強いヨコナア手法をみる。31・32は細身の甕底部片、33は鉢口縁である。34は高杯の杯部から脚部片であり、脚部内面にヨコズリと杯部には円盤充填が確認できる。35は台付鉢であり、脚端部には一条の凹線文がみられる。

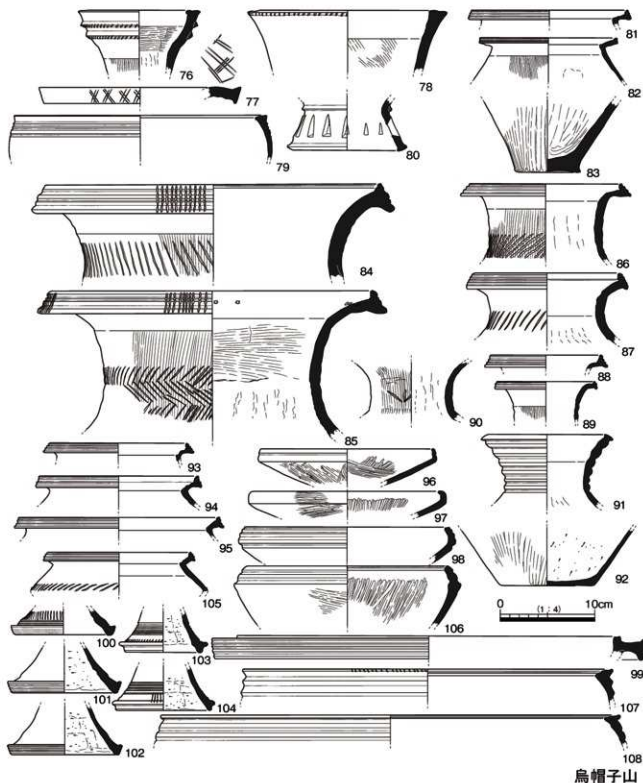
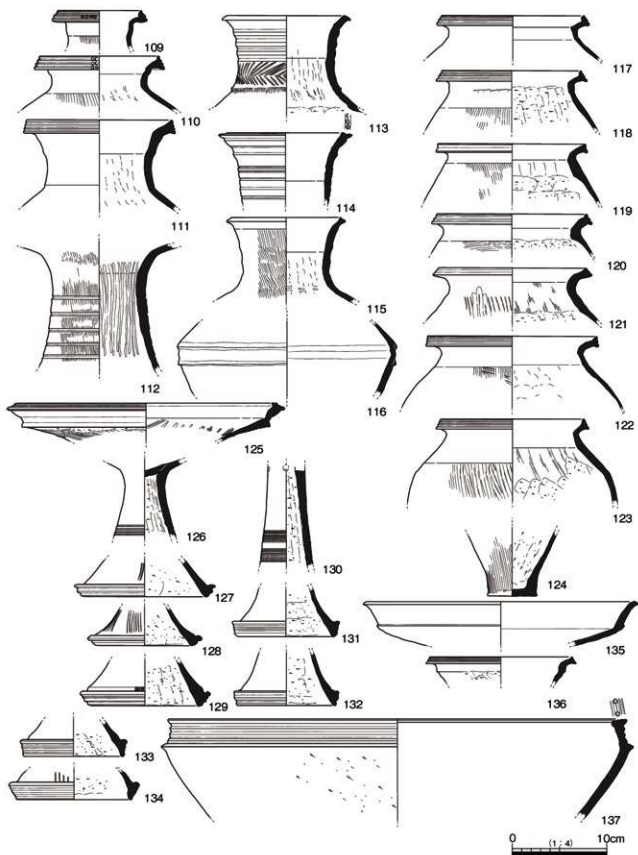


図4 高地性集落出土資料3

心経山出土資料のうち、この資料は中期Ⅱ-1期から中期Ⅲ-1期に属するが、後述する既往の報告資料には中期Ⅲ-3期までのものが含まれる。

(7) 西方(図3-36～75)

西方は、備讃瀬戸西部の塩飽諸島の一つである与島に所在する。与島の地形は、中央の低地を挟み南北方向の東西二つの丘陵から構成されてお



烏帽子山

圖5 高地性集落出土資料4

り、東側丘陵は「東方」、西側丘陵が「西方」と呼ばれ、西方は瀬戸大橋架橋建設に伴い発掘調査が実施された。中でもA・B地区とされた丘陵北部稜線上(標高45~50m)の調査区から弥生土器が出土している。既往の報告資料<sup>(註13)</sup>に加えて、時期比定可能な資料を図化した。

36~57は壺である。46は口縁部外面と同内面に円形浮文を多量に付与する。口縁部外面における多量の円形浮文は、四国側讃岐ではあまりみられない属性である。55は内傾する頸部から緩やかに開くもので、児島の城遺跡<sup>(註14)</sup>に数点の類例がある。南九州系の可能性も考えたが、備讃瀬戸島嶼部に分布する型式として捉えておく。58~65は甕。凹線文が発達する58~62と、跳ね上げ口縁をもつ63-65がある。66は甕口縁の可能性はあるが、残存する頸部形態から台付鉢と考えた。68~73は高杯。72-73は脚部形態や三角形透孔からみて吉備系の高杯である。他の資料と異なる白色系胎土をもつことから、児島若しくは吉備南部からの搬入品と考えられる。74は壺若しくは台付鉢とみられる資料で、外面に鋸歯文が施される。胎土は他の資料と違和感がみられないが、多系統の資料とみられる。75は大型の台付鉢の脚部片である。

西方出土資料の帰属時期は、中期Ⅱ-2~中期Ⅲ-3までの時間幅をもつものと考えられる。

#### (8) 烏帽子山(図4-76~図6-143)

烏帽子山は、先に触れた五色台の南西部の支峰(標高260m)であり、山上が讃岐岩質安山岩に覆われるビュートと呼ばれる円錐形の山容からその名で呼ばれている。遺物は山頂から北斜面に多く分布するとされ<sup>(註17)</sup>、昭和24(1949)年頃からの採石に伴い、遺物採取や発掘調査<sup>(註18)</sup>が実施されたが、現在、山頂は消滅している。本稿の報告資料は昭和44(1969)年に山頂で採取された資料<sup>(註19)</sup>の中から、高地性集落の継続時期を示す資料を中心に抽出した。また、資料数が多量である

ため、時期別に提示し、説明を加えていきたい。

76~83は中期Ⅱ-2~中期Ⅲ-1期の資料である。細頸壺(76)は、口縁端部上面に凹線文を施す。広口壺(77)は、口縁部内外面に斜格子文を施文するが、中期Ⅱ-1期に比べて、線数が減少している。78はバケツ形の鉢、79は内傾する口縁部をもつ鉢で口縁部下に3条の凹線文をもつ。80はジョッキ形の台付鉢脚部。甕口縁(81~82)は口縁部に小条の凹線文をもつが、端部の拡張は顕著ではなく、凹線文の出現期の特徴をもつ。甕底部(83)は内面ケズリがみられない厚みのある中期中葉の形態をもつ。

84~108は中期Ⅲ-2~中期Ⅲ-3期に属する資料である。84~92は壺である。84-85は口縁部が大きく開き口縁端部に凹線文、頸部に列点文をもつもので、中期末葉の特徴を示す。広口壺(90)の頸部外面には記号文がみられる。甕口縁(93~95)は口縁部の拡張が進むが、95は中期末葉の形態の特徴をもつ。高杯(96~104)のうち、99は垂下口縁をもつもので、口縁部外面には4条の凹線文を施す。105~108は鉢であり、105は脚台付と考えられる。

109~137は、後期Ⅰ-1~後期Ⅰ-2に比定される資料である。109~116は壺であり、116は胴部最大径に2条の貼付突帯をもつもので、吉備系とみられる。117~124は甕であり、口縁部の屈曲や内面ケズリが上方に及ぶなど、後期初頭から後期前葉の特徴をもつ。125~135は高杯であり、形態や施文方法からみて、吉備系(125~128、130)、備中・備後系(133-134)が含まれる。吉備系(125,127)は同一個体の可能性がある。135は口縁端部の拡張を失っており、これらの中でも最も後出する資料である。鉢(136)は形態や外面ケズリからみて、備中・備後系と考えられる。137の大型鉢は、口縁部形態からみて讃岐ではあまりみないものである。

138~143は後期後葉から終末期にかけての資料である。広口壺(138,139)は口縁端部外面に鋸

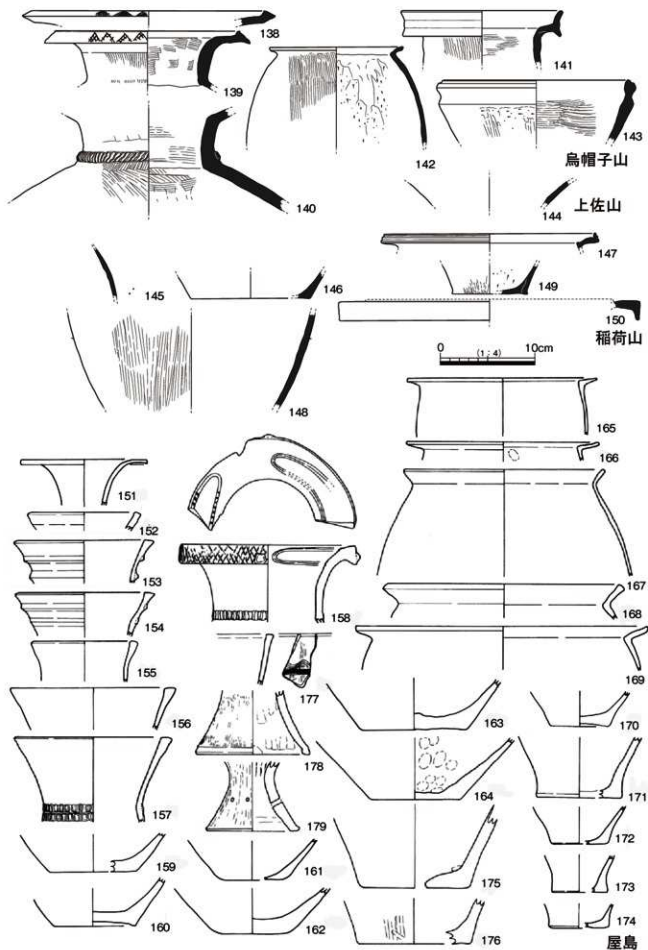


圖6 高地性集落出土資料5

歯文をもつもので、讃岐西部に多く見られるものである。141は、広口壺の口縁部上端を継ぎ足すことで複合口縁壺とするもので、讃岐西部に類例がみられる。甕(142)は胴部が強く張り、内面ケズリの上位に及ぶことからみて終末期に下る資料であろう。鉢(143)は、形態や調整からみて、後期後葉以降の備中・備後系の資料と考えられる。

これらの烏帽子山出土資料は、中期Ⅱ-2期から後期Ⅰ-2期までの時間幅をもつ。後期後葉から終末期の資料は、後期Ⅰ-2期から一定期間を経たもので、中期中葉段階から後期前葉段階の高地性集落とは異なるものであろう。讃岐で後期後葉から終末期に山頂立地の集落は烏帽子山以外では殆ど知られていない。

#### (9) 上佐山(図6-144)

上佐山(標高256m)は、高松平野南部に位置する。既往の報文<sup>(註29)</sup>において高地性集落の存在が指摘されていたが、土器等の考古資料が不明であった。実査を行った結果、少量の土器片を採取したため、図化可能な資料1点を提示しておく。

144は大きく開く形態や厚みから判断して、高杯若しくは台付鉢の上半部と考えられる。詳細な時期決定は困難であるが、中期後葉の資料として違和感がない。

#### (10) 稲荷山(図6-145～150)

稲荷山(標高166m)は、高松平野北部にある石清尾山山塊の東部の支峰の一つである。稲荷山には、古墳時代前期の4基の積石墳が所在し、この内、稲荷山南塚古墳の調査で弥生土器が出土している<sup>(註25)</sup>。

145・146は壺であり、145は胴部最大径付近に櫛描文本体による列点文を施す。壺底部(146)は薄い器壁や底胴部界が明瞭であるなど、凹線文盛行期の特徴をもつ。甕口縁(143)は強いヨコナデにより口縁端部が上方に拡張され、同外面には2条の凹線文が施される。甕底部(149)は直

立気味に立ち上がる形態や胎土的特徴からみて、口縁部(147)と同一個体の可能性が高い。150は壺口縁の可能性はあるが、垂下口縁の高杯とみる。

稲荷山出土資料は、中期Ⅱ-1期～Ⅲ-1期にまとまると考えられる。

#### (11) 屋島(図6-151～179)

屋島(標高292m)は、高松平野北東部の備讃瀬戸に突き出した開析溶岩台地(メサ)であり、近世以降の干拓により地続きとなる以前は、鳥若しくは陸繋島であった。山上はメサ特有の平坦地が南北に延び、それぞれ北嶺・南嶺と呼ばれている。最高所は南嶺にあり、古代山城の屋嶋城や屋島寺境内の発掘調査において、弥生土器が出土している<sup>(註28)</sup>。

151は広口壺、152～154は口縁部下に貼付突帯を巡らす細頸壺である。155～157は直口壺、158の広口壺は口縁部内面に貼付突帯により受口状の加飾をもつ。165～169は甕口縁であり、165・167は短口縁であるが、166・168・169は強い横ナデによる跳ね上げ口縁をもつ。171～174の甕底部は内面が突状となるものである。177は外面に櫛描文をもつジョッキ形の鉢、178・179は台付鉢の脚部と考えられる。

屋島出土資料は、いずれも凹線文がみられないものであるが、形態的特徴から凹線文出現期の資料が含まれると考えられることから、中期Ⅱ-1期～中期Ⅱ-2期を中心とする資料と推定される。

#### (12) 五剣山(図7-180～184)

五剣山(標高375m)は、高松平野北東部の庵治半島に所在する山塊で、山上が差別浸食を受けた火山角礫岩・凝灰角礫岩の南北五つの峰から成ることによる。北寄の峰頂部の直下の東側斜面から弥生土器・石器が採取されており、だんべら遺跡として知られている<sup>(註28)</sup>。峰頂部は浸食作用により狭隘な岩塊となっており、これらは同部からの転落資料と考えられる。



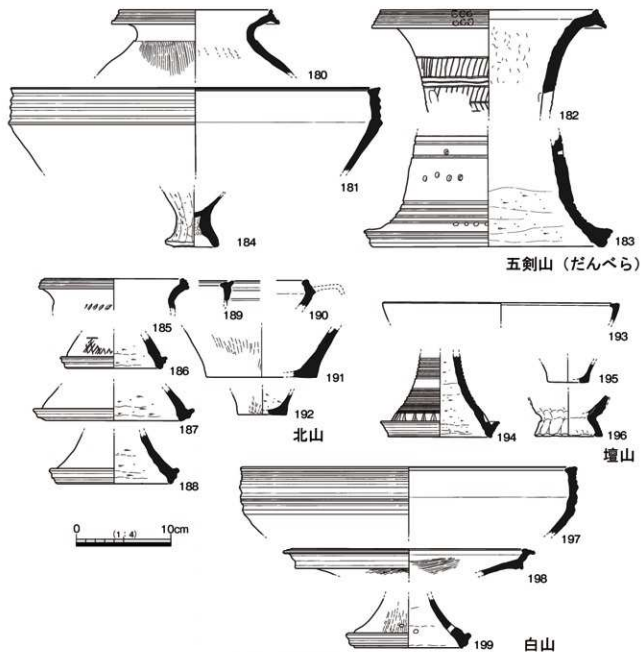


図7 高地性集落出土資料6

180は短頸広口壺、181は大型鉢である。182・183は器台、184は製塩土器の脚部片である。

五剣山（だんべら遺跡）出土資料は、形態や製塩土器<sup>(註29)</sup>からみて後期I-1期に比定できる。

### (13) 北山（図7-185～192）

北山（標高288m）は、讃岐東部の播磨灘に突き出した開析溶岩台地（メサ）である。比較的平坦となる山上から弥生土器・石器が採取され、既

往の研究<sup>(註28)</sup>においても高地性集落の存在が指摘されているが、資料図は公表されておらず、今回、時期比定可能な土器資料<sup>(註29)</sup>を報告する。

185は短頸広口壺であり、口縁端部に3条の凹線文、頸部にハケ原体による列点文を施す。186～188は高杯脚部片であり、凹線文盛行期の形態が影らむ（186・187）と、端部の拡張から後期初頭に下る（188）がみられる。189は鉢口縁、190は垂下口縁の高杯とみられる。191・192は甕底部

であるが、中期中葉にみられる形態的特徴をもっている。

北山出土資料は、中期Ⅱ-2期から後期Ⅰ-1期の時間幅で捉えられる。

#### (14) 壇山 (図7-193～196)

壇山(標高400m)は、備讃瀬戸北東部に位置する豊島に所在する山塊であり、開析溶岩台地(メサ)により台形の山容を呈する。既往の研究<sup>(註27)</sup>においても高地性集落として挙げられており、詳細な出土地点は不明であるが弥生土器が表採されている<sup>(註28)</sup>。

193は台付鉢の口縁部。194は高杯脚部であり、外面には最下段に不貫通の三角形透孔とその上位に多条の凹線文帯を施す。195は内面が突状となる甕底部片。196は製塩土器とみられるが、外面はケズリに伴う砂粒移動の痕跡がみられない。

壇山出土資料の帰属時期は、中期Ⅱ-1期から中期Ⅱ-2期の台付鉢(193)や甕底部(195)と、中期Ⅲ-2期の凹線文が発達する高杯脚(194)に分けられる。製塩土器(196)<sup>(註29)</sup>は、高杯脚(194)に伴う資料と考えられる。

#### (15) 白山 (図7-197～199)

白山(標高203m)は、高松平野東部と東讃の長尾・大川地域との境界付近に所在する。山頂及び山麓部の数地点に弥生集落の分布が知られ、山頂部は高地性集落として報告<sup>(註30)</sup>されているものである。山頂より出土した土器の概略については、既往の報告で確認できるが、本稿では実物資料の確認が可能な3点に絞って再提示する<sup>(註31)</sup>。

197は鉢であり、外面には多条化した凹線文帯が確認できる。讃岐地域内においてこれほどまでに凹線文が発達する鉢の類例はあまりみない。198・199は高杯であり、胎土中に角四石を多く含む。

白山出土資料の帰属時期は、凹線文盛行期のⅢ-2期からⅢ-3期とみられる鉢(197)と、後期Ⅰ-1期に下る高杯(198・199)と考えられる。

#### 2 その他の高地性集落出土土器

これらは、既往の報告資料のうち、現在、所在不明のため実物の確認が行えなかったものであり、ここでは参考資料として提示することとした。

#### (16) 心経山 (図8～12)

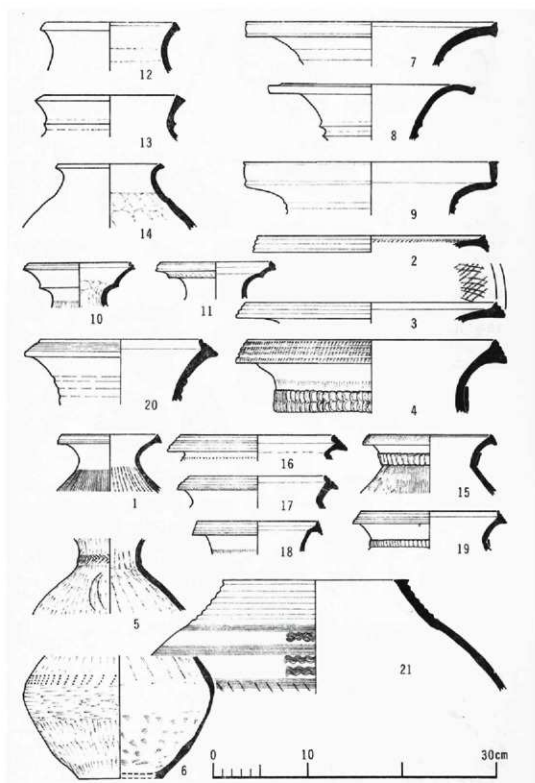
遠藤順昭・町田章による昭和30(1955)年の発掘調査資料<sup>(註32)</sup>。発掘区は石切場(第1区、詳細場所不明)と山頂下西南斜面(第2区)の2地点の土器等が資料化されている。

これらの資料の帰属時期は、既往の報告において指摘されているとおり、その多くが中期中葉(紫雲出山Ⅰ式)<sup>(註33)</sup>から中期末葉(紫雲出山Ⅲ式)とみられ、筆者の編年では中期Ⅱ-1期から中期Ⅲ-3期に相当するものである。しかし、少数であるが、後期初頭の後期Ⅰ-1期に下る資料(図9-40.42.53～54.59)が含まれている。また、土器様式の特徴は、児島及び吉備南部とみられる口縁部の上方への拡張が顕著な広口壺(図8-20)や甕(図8-16)、脚部上端摘まみ出し、三角形透(図11-98.100)や円形多孔透(図11-92)をもつ高杯又は台付鉢等、直立する口縁部外面に多条の凹線文をもつ高杯又は台付鉢(図10-72～74、図11-82～84)や、燧灘沿岸に分布する短い頸部から口縁部が小さく開く広口壺(図8-1)など、四国備讃岐西部でありみられない他地域の特徴をもつ資料がみられる。

口縁部が短く開く壺(図8-14)は与島の西方遺跡や児島の城遺跡など、備讃瀬戸島嶼部において少数確認できるものである。

#### (17) 鷲ヶ峰<女木島>(図13)

女木島は、高松市の沖合約5kmの中部備讃瀬戸の島嶼の一つである。島の北部には鷲ヶ峰(標高187m)があり、昭和6(1931)年の展望台建設に伴い、山頂や下下の南西斜面で貝塚が確認されており、出土品は新海功<sup>(註34)</sup>、城福勇<sup>(註35)</sup>により



遠藤順昭・町田章 1970 『讃岐広島心経山の弥生遺跡』 『古代学』 17 巻 2 号より転載

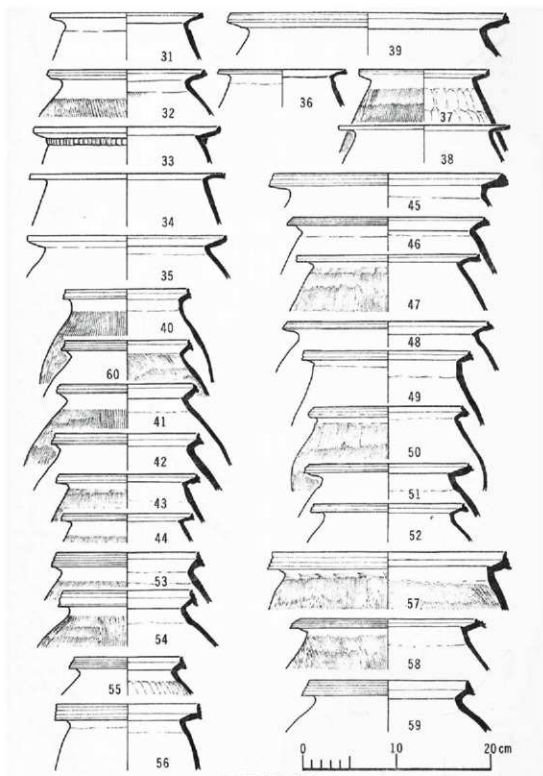
図8 既往の報告資料1（心経山その1）

報告されている。

Ⅱ-2期から中期Ⅲ-2期におさまるものとみられ

図面等からの判断ではあるが、出土土器は中

る。



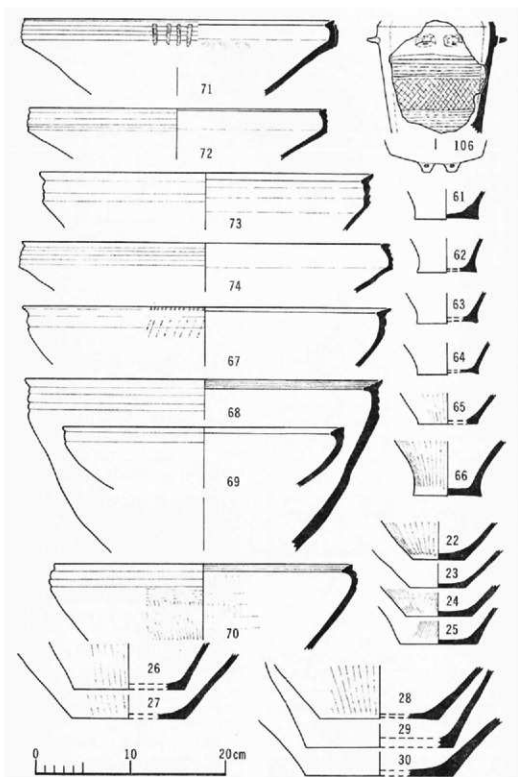
遠藤順昭・町田章 1970 『讃岐広島心経山の発見遺跡』 『古代学』 17 巻 2 号より転載

図9 既往の報告資料2 (心経山その2)

(16) 伽藍山 (図 13)

伽藍山 (標高 216 m) は、高松平野南西部に位置する。上部が安山岩に覆われた円錐形の山容をもち、山頂から弥生土器・石器が採取されている<sup>(註30)</sup>。

出土土器は広口壺口縁、底部から成り、形態的特徴から中期Ⅲ-1 期から中期Ⅲ-2 期に比定される。



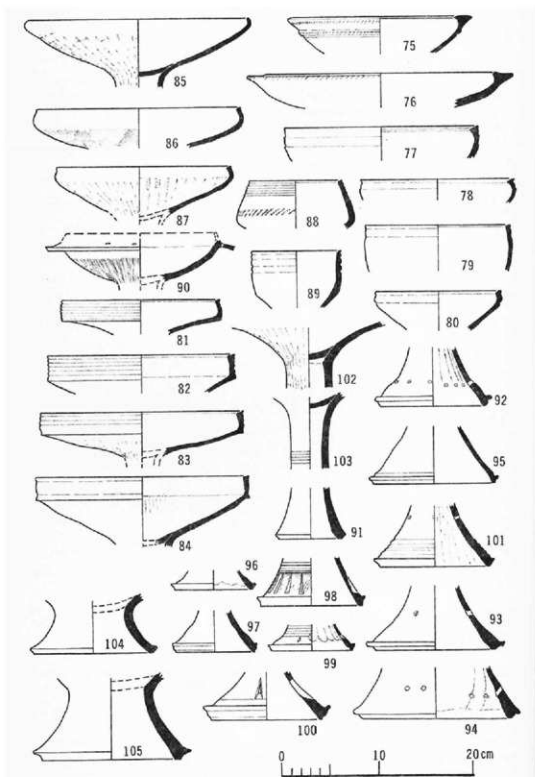
遠藤順昭・可田章 1970 『讃岐広島心経山の弥生遺跡』『古代学』17巻2号より転載

図10 既往の報告資料3（心経山その3）

おわりに

本稿では、讃岐地域の高地性集落出土資料のうち、土器について資料化と既往報告資料の集成を行った。全体での土器の帰属時期は、鳥帽子山を

除いて弥生時代中期中葉（中期Ⅱ-1期）から後期初頭（後期Ⅰ-1）に収まるものであり、中でも、細別時期における中期Ⅱ-2期から中期Ⅲ-2期の資料が多い（表1上段）。

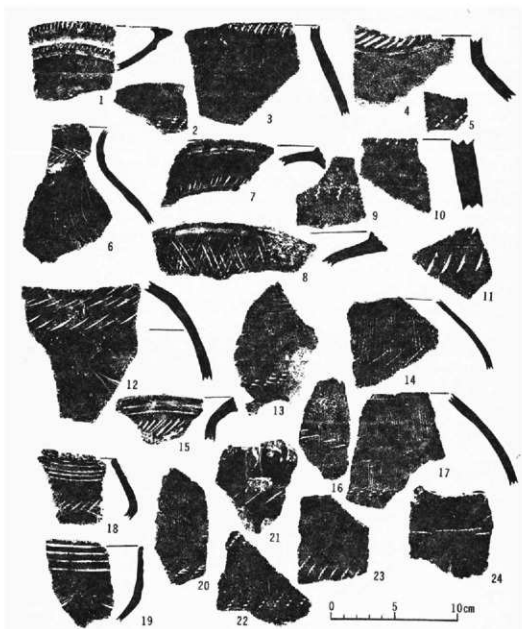


遠藤昭昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17巻2号より転載

図 11 既往の報告資料 4 (心経山その 4)

しかし、これらは表面採集等の発掘調査を経ていないものが多く、各高地性集落の時期を限定するには至らない。一定量の土器資料が得られてい

る紫雲山遺跡の土器出土量の変遷と、本稿における他の高地性集落出土土器の時代的な傾向が一致することからすれば、備讃瀬戸の高地性集落は、



遠藤順昭・町田章 1970『讃岐広島心経山の発生遺跡』『古代学』17巻2号より転載

図12 既往の報告資料5（心経山その5）

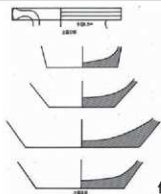
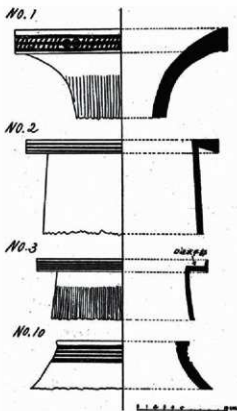
個別的ではなく、全体の関係性の中で出現・経営・廃絶したと考えられる。筆者は、このような高地性集落の機能を、立地や土器様式などの考古資料からみて、「烽火」などを用いた交流・交易における通信・伝達に特化した集落と推定している<sup>(18)</sup><sup>(30)</sup>。また、その経営にあたっては、土器等の必要物資を通信・伝達先となる平野部の拠点集落から供給を受けていたと考える<sup>(18)</sup><sup>(30)</sup>。

今後は、本稿における土器資料の胎土分析等を

進め、高地性集落の経営主体やその実態について分析を進めていきたい。

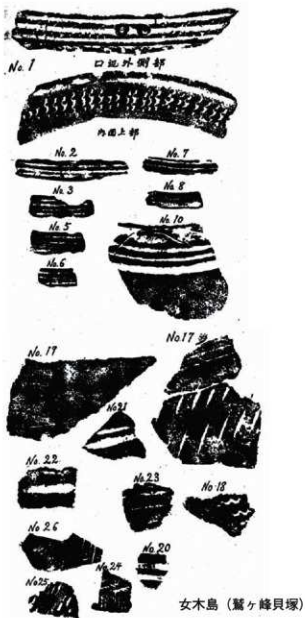
本稿を成すにあたり、以下の方々の協力を得た。記して感謝申し上げる。

高上 拓 松浦暢昌 松田朝由 眞鍋一生  
山下舞子



伽藍山

権紙村誌研究会・権紙村誌編集委員会 1986『権紙村誌』より転載



女木島 (鷺ヶ峰貝塚)

新岡功 1933『讃岐國女木島鷺ヶ峰貝塚小報』『人類學雜誌』第48卷第1号より転載



女木島 (鷺ヶ峰貝塚)

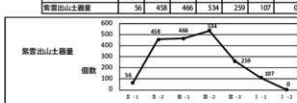
城福勇編 1967『女木島の歴史』地方史研究会報第3号 ※縮尺不明  
香川大学学芸部内地方史研究会より転載

図 13 既往の報告資料 6 (鷺ヶ峰・伽藍山)



表1 各高地性集落と紫雲山出土器量の変遷

地域区分	遺跡名	中期						後期	
		日-1	日-2	日-1	日-2	日-3	日-1	日-2	
讃岐西部	紫雲山								
	尾山(野田山)								
	塚ノ山								
	御山								
	尾山								
讃岐東部	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
尾山・島嶼部	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
	尾山								
時期決定可能遺跡数	6	13	36	13	11	8	1		



- 註1 小林行雄・佐原真 1964『紫雲山 香川県三豊郡詫間町紫雲山弥生式遺跡の研究 詫間町文化財保護委員会』
- 註2 遠藤順昭・町田章 1970『讃岐広島心経山の弥生遺跡』『古代学』第17巻第2号 古代学協会 96-109頁
- 註3 六車忠一 1979『香川県誌』小野忠熙編『高地性集落の研究』資料編 学生社 439-481頁
- 註4 近藤義徳・小野昭 1979『岡山県貝殻山遺跡』小野忠熙編『高地性集落の研究』資料編 学生社 864-892頁
- 註5 信里芳紀 2005『讃岐地方における弥生中期から後期初期の土器編年-岡蔵文期を中心として-』香川県埋蔵文化財センター 研究紀要1『香川県埋蔵文化財センター 33-62頁』
- 註6 信里芳紀 2019『第6章特論第1節 紫雲山出土遺跡の土器・鉄器の特性』『紫雲山出土遺跡』三豊市教育委員会 227-244頁
- 註7 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料 丸亀市教育委員会 1984『青ノ山8号・9号発掘発掘調査報告』香川県丸亀市青ノ山山頂所存の後、終末期古墳の調査
- 註8 野田山は史料上では確認できず、廃寺化した山形寺の伝承からの地名と考えられる。
- 註9 普通達寺教育委員会所蔵資料。野田山古墳整備事業に伴う発掘調査の出土品の一部は下記文献で公開されている。出土品コンテナ約80箱の報告資料(壘形埴輪・古瓦片等)から、弥生土器を抽出した。
- 註10 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(川畑遺寄贈資料)。採取土器や石器(打製石廬丁)など一部に墨書で「城山山頂」、【城山山頂地神社】「城山山頂地神社」の記がある。【地神社】の場所の特定はできないが、本稿ではこれら山頂出土資料としてまとめて取り扱う。
- 註11 氏は城山での弥生土器の出土を報じた文献として、六車忠一は1956『讃岐彌生式土器集成図録』【文化財協会報】特別号第1集 香川県文化財保護協会 48-69頁
- 註12 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(川畑遺寄贈資料)。同資料には、弥生土器や打製石廬の他に、縄文期の巴式石廬がある。

- 註12 実査では、鞍部南側の玉頭山(標高312m)に向かう稜線においても遺物散布が認められ、これら山塊の複数地点に遺構が展開することが予測される。
- 註13 前掲註2文献
- 註14 丸亀市資料館所蔵資料(瀬戸内海歴史民俗資料館旧蔵資料 図 27~32)、さぬき市所蔵資料(六車忠一寄贈資料、図1-34.35)
- 註15 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料 香川県教育委員会 1979『宇島西方遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(1)
- 註16 岡山県教育委員会 1977『倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告-県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査-』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(19) 報告書番号448、481~483
- 註17 香川県教育委員会編 1983『新編香川書考古篇』197-202頁
- 註18 坂出市教育委員会 1994『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成5年度国庫補助事業報告書 鳥帽子山遺跡 南谷遺跡 横山庵寺 坂出市教育委員会 1999『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成10年度国庫補助事業報告書 史跡城山 鳥帽子山遺跡 坂出市教育委員会 2003『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成14年度国庫補助事業報告書 鳥帽子山遺跡 開法寺遺跡
- 註19 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(瀬戸内海歴史民俗資料館旧蔵資料)
- 註20 前掲註3文献
- 註21 これまで石清尾山山塊では、前掲註3文献をはじめ、峰山北側の鞍部の播磨谷遺跡で中期後半に属する土器や石器が採取されていることを根拠として、同遺跡を高地性集落として認定する見解がみられる。しかし、遺跡の立地は当該期の讃岐地域で多く見られる谷部地を利用するものであり、前者は高地性集落に含める立場を探らない。
- 註22 挿録谷遺跡出土資料は、以下の文献で報告されている。高松市教育委員会 1973『石清尾山城古墳群調査報告』
- 註23 高松市教育委員会所蔵資料 高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋島 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告書第52集
- 註24 高松市教育委員会 2007『屋島寺 屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書高松市埋蔵文化財調査報告書第107集』
- 高松市教育委員会 2008『屋嶋城跡』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ 高松市埋蔵文化財調査報告書第113集
- 註25 高松市教育委員会所蔵資料『香川県埋蔵文化財包蔵地調査カード』昭和47(1972)年 庵治町No.002 高松市 2007『庵治町史』
- 註26 大久保徹也氏の備置式(古相)に比定できる。
- 註27 大久保徹也 2002『第6章まとめ - 瀬羽神社境内遺跡の消長と土器製法の展開 -』瀬羽神社境内遺跡 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書第5冊 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅳ 高松市埋蔵文化財調査報告書第236集 27-35頁
- 註28 前掲註3文献
- 註29 さぬき市歴史民俗資料館所蔵資料。図示した土器類以外に、数10点の打製石廬がある。
- 註30 前掲註3文献
- 註31 土庄町教育委員会所蔵資料(森井正資料)
- 註32 大久保徹也氏の備置式に比定できる。前掲註24文献。
- 註33 前掲註3文献
- 註34 さぬき市所蔵資料(六車忠一寄贈資料)のうち、6車忠一 1956『讃岐彌生式土器集成図録』【文化財協会報】特別号第1集 香川県文化財保護協会 48-69頁
- 註35 前掲註2文献
- 註36 佐原真 1964『讃岐第3節土器の相対年代』(前掲註1文献所収)
- 註37 新海功 1933『讃岐岡草木鳥鷲ヶ峰貝塚小報』『人類学雑誌』第48巻第1号 43-52頁
- 註38 城福勇 1957『女木島の歴史』香川県大学芸部内地方史研究会 高松市女木町支所
- 註39 36棟村誌研究会・榎村史編集委員会 1986『榎村誌』(土器・石器図面)
- 註40 香川県 1987『香川県史』第13巻資料編 考古
- 註41 信里芳紀 2022『備置瀬戸における高地性集落と其の背景』【古代文化】第74巻第2号2号
- 註42 信里芳紀 2019『第6章特論第1節 紫雲山出土遺跡の土器・鉄器の特性』『紫雲山出土遺跡』三豊市教育委員会

## 香川県内出土須恵器の産地推定

白石 純・森本 蓮 (岡山理科大学)

### はじめに

この報告では第1表に示した5遺跡から出土した7世紀後半から14世紀の須恵器の理化学的な胎土分析を実施し、十瓶山窯跡群で生産されたものなのか、あるいは他地域から搬入されたものなのかを検討した。

これまで県内の須恵器の胎土分析では、古墳時代を中心とした綾南町周辺の窯跡出土須恵器の胎土分析(三辻・渡部1992)が行われている。今回の胎土分析では、綾歌郡綾川町から坂出市府中町にかけて分布する十瓶山窯跡群出土須恵器(7世紀中頃～14世紀)の流通について検討した。なお、十瓶山窯跡群の窯跡出土須恵器については、すでに報告しており、この窯跡群内での胎土を比較検討したところ、窯跡の立地、時期によって胎土が異なることが推定された(森本・白石2020)。また、生産地試料としては、十瓶山窯跡群以外に岡山県瀬戸内市邑久窯跡群の試料も比較試料として分析した。

### 1 分析方法・試料

測定装置、条件、試料は以下の通りである。

測定装置：エネルギー分散型蛍光X線分析計  
(日本電子JSX-3202EV)を使用。

測定条件：X線照射径2.5mm、電流50～200 mA、電圧50kV/15vK、測定時間200秒、測定室内は真空状態で分析した。

測定元素：SiO<sub>2</sub>・TiO<sub>2</sub>・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・MnO・MgO・CaO・Na<sub>2</sub>O・K<sub>2</sub>O・P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の10元素である。

測定試料：裁断機で一辺が1cm前後の大きさにカットし、試料表面についた汚れを研磨機で除去したあとに乾燥。乾燥し試料をタングステンカーバイト製の乳鉢で

粉末(100～200メッシュ)にしたものをリングに入れ、加圧成形機で約10トンの圧力をかけて成形した試料を測定試料とした。従って一部破壊分析である。

分析した遺跡出土須恵器は、第1表に示した53点で、器種としては杯、高杯、壺、甕、碗などである。

### 2 分析結果と考察

分析結果は、特に差がみられたCaOとK<sub>2</sub>Oの元素から散布図を作成して検討した。

産地推定を実施した遺跡は第1表に示した5遺跡で、坂出市の讃岐国府跡、高松市の多肥松林遺跡・多肥北原西遺跡・多肥北原遺跡、綾川町の西末則遺跡である。遺跡の性格としては、讃岐国府が官衙跡、その他は集落遺跡である。

#### 讃岐国府跡

第1図(K<sub>2</sub>O-CaO散布図)では、讃岐国府より出土した須恵器(第6図1～16)の産地推定を行った。その結果、分析番号1、2、7、13以外はすべて十瓶山窯跡群の領域に分布した。そして1(杯蓋)、13(皿)は十瓶山窯跡群と邑久窯跡群が重なる領域に分布した。また、2(碗)、7(高杯)は両方の産地には分布しなかった。

#### 多肥松林遺跡

第2図では、多肥松林遺跡より出土した須恵器(第6図17～25)の産地を推定した。すると19、21、22の杯蓋以外は、十瓶山の領域に分布し、19、21、22は、邑久領域に分布した。

### 多肥北原西遺跡

第3図は多肥北原西遺跡より出土した須恵器(第6図26～37)の産地推定をした。その結果、32(高台付杯身)は邑久領域に、それ以外は十瓶山の領域に分布した。

### 多肥北原遺跡

第4図は多肥北原遺跡から出土した須恵器(第6図38～44)の産地推定をした散布図である。39(杯蓋)が邑久領域に、それ以外はすべて十瓶山領域に分布した。

### 西末則遺跡

第5図は西末則遺跡出土須恵器(第6図45～53)の産地推定結果である。この遺跡出土の須恵器はすべて、十瓶山の領域に分布した。

### まとめ

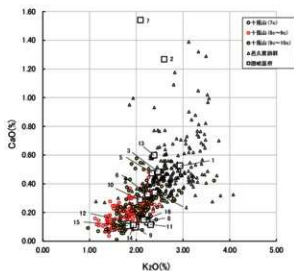
各遺跡出土須恵器の産地推定を実施した結果、ほとんどの須恵器が、十瓶山窯跡群から供給されていることが推定された。しかし、なかには邑久窯跡群の領域に入る須恵器もあり、今回の分析では、邑久から供給されたことが推定された。また、讃岐国府跡より出土した2(碗)、7(高杯)の須恵器は、邑久の領域にも分布しないことから今回の分析では、産地がはっきりしなかった。

今回の産地推定の分析では、讃岐国府跡、高松市内の遺跡、綾川町の遺跡など限られた遺跡出土須恵器の産地推定を実施したところほとんどの須恵器が十瓶山窯跡群と推定された。

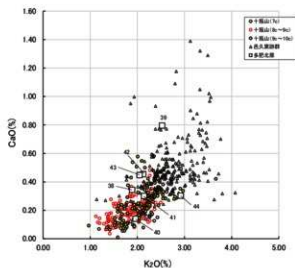
また、生産地須恵器が十瓶山窯跡と岡山県瀬戸内市邑久窯跡群の二大生産地との比較のみで生産地が限られたものであったが香川県内の消費地遺跡でも十瓶山の生産地以外の邑久からも供給されていることが推定された。今後の課題として、生産地および消費地遺跡の試料を増やし検討することで古代の須恵器の流通が解明されることが期待される。

### 引用・参考文献

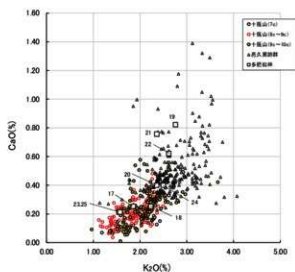
- 香川県教育委員会2012『多肥北原遺跡』香川県埋蔵文化財センター編  
香川県教育委員会2015『多肥北原西遺跡』香川県埋蔵文化財センター編  
香川県教育委員会2015『西末則遺跡V』香川県埋蔵文化財センター編  
香川県教育委員会2016『讃岐国府跡1』香川県埋蔵文化財センター編  
香川県教育委員会2017『多肥松林遺跡』香川県埋蔵文化財センター編  
香川県教育委員会2019『讃岐国府跡2』香川県埋蔵文化財センター編  
佐藤竜馬1994「十瓶山窯跡群の分布に関する一試考」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』香川県埋蔵文化財センター編  
三辻利一・渡部明夫1992「綾南町周辺の窯跡出土須恵器の胎土分析について」『香川史学』21 香川歴史学会  
森本 蓮・白石 純2020「香川県十瓶山窯跡群出土須恵器の胎土分析」『半田山地理考古』第8号 岡山理科大学地理考古研究会



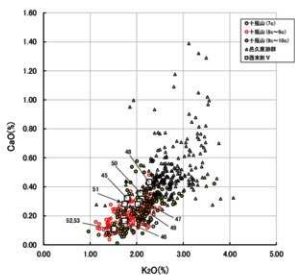
第1図 讃岐国府跡出土須恵器の産地推定



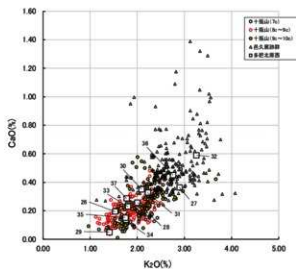
第4図 多肥北原遺跡出土須恵器の産地推定



第2図 多肥松林遺跡出土須恵器の産地推定



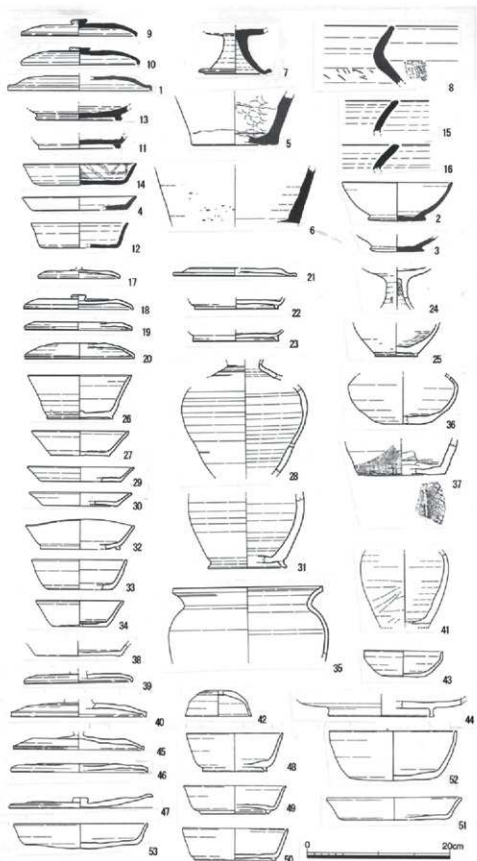
第5図 西末則遺跡出土須恵器の産地推定



第3図 多肥北原西遺跡出土須恵器の産地推定

第1表 香川県内遺跡出土須恵器胎土分析一覧表(%)

試料番号	遺跡名	器種	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>
1	讃岐国府 I	蓋	72.48	0.97	16.20	6.17	0.01	0.00	0.53	0.34	2.93	0.02
2	讃岐国府 I	碗	75.58	0.85	13.95	4.30	0.64	0.00	1.27	0.16	2.60	0.59
3	讃岐国府 I	碗	78.19	0.86	15.11	4.26	0.02	0.00	0.48	0.35	2.47	0.01
4	讃岐国府 I	皿	75.53	0.94	15.45	5.94	0.02	0.00	0.34	0.10	2.40	0.01
5	讃岐国府 I	壺	77.22	0.75	17.45	3.57	0.02	0.00	0.47	0.09	2.34	0.06
6	讃岐国府 I	壺	75.03	0.91	15.64	6.16	0.01	0.00	0.33	0.16	2.24	0.00
7	讃岐国府 II	高坏	72.87	0.77	17.87	4.58	0.02	0.00	1.54	0.32	2.09	0.00
8	讃岐国府 II	高坏	80.99	1.18	14.96	3.59	0.01	0.00	0.13	0.00	2.23	0.02
9	讃岐国府 II	蓋	77.75	1.10	14.95	5.55	0.01	0.00	0.10	0.08	1.99	0.01
10	讃岐国府 II	蓋	72.55	0.95	16.78	6.55	0.01	0.00	0.29	0.27	2.08	0.01
11	讃岐国府 II	杯	79.61	1.09	14.57	4.43	0.01	0.00	0.11	0.16	2.31	0.02
12	讃岐国府 II	杯	75.37	0.89	15.14	6.81	0.03	0.00	0.12	0.16	1.82	0.06
13	讃岐国府 II	皿	74.69	0.87	15.85	5.89	0.03	0.00	0.60	0.13	2.38	0.04
14	讃岐国府 II	皿	79.82	0.90	14.34	5.00	0.01	0.00	0.11	0.10	1.94	0.00
15	讃岐国府 II	壺	80.69	1.16	14.72	4.17	0.01	0.00	0.11	0.06	1.82	0.01
16	讃岐国府 II	壺	79.64	1.13	15.21	4.04	0.01	0.00	0.15	0.10	2.16	0.01
17	多肥松林	蓋	69.26	0.96	16.76	8.64	0.01	0.00	0.25	0.19	1.86	0.00
18	多肥松林	蓋	76.31	0.87	14.27	6.30	0.01	0.00	0.25	0.33	2.23	0.01
19	多肥松林	蓋	69.71	1.02	17.02	6.73	0.03	0.00	0.82	0.47	2.76	0.00
20	多肥松林	蓋	78.46	0.95	16.96	3.15	0.01	0.00	0.40	0.13	2.36	0.04
21	多肥松林	蓋	67.35	1.18	17.48	7.77	0.04	0.00	0.76	0.37	2.36	0.01
22	多肥松林	杯	70.68	1.06	15.68	7.55	0.02	0.00	0.62	0.35	2.62	0.01
23	多肥松林	杯	79.86	0.90	16.37	3.59	0.01	0.00	0.21	0.10	1.55	0.02
24	多肥松林	高坏	77.99	0.79	15.75	3.92	0.01	0.00	0.40	0.30	2.50	0.02
25	多肥松林	壺	80.83	0.92	16.12	3.27	0.00	0.00	0.21	0.07	1.57	0.02
26	多肥北原西	杯	76.82	0.96	15.53	5.90	0.02	0.00	0.20	0.02	1.53	0.03
27	多肥北原西	壺	74.59	1.07	16.77	4.79	0.02	0.00	0.36	0.21	2.90	0.03
28	多肥北原西	杯	71.86	0.95	15.62	7.94	0.02	0.00	0.26	0.12	2.00	0.04
29	多肥北原西	皿	75.99	1.00	16.47	5.86	0.01	0.00	0.05	0.02	1.41	0.04
30	多肥北原西	皿	67.10	1.00	16.03	9.14	0.01	0.00	0.35	0.14	2.09	0.60
31	多肥北原西	壺	74.16	0.98	15.89	6.07	0.02	0.00	0.33	0.24	2.23	0.07
32	多肥北原西	杯	79.55	0.69	15.32	3.02	0.02	0.00	0.59	0.29	3.25	0.02
33	多肥北原西	杯	76.39	1.14	15.63	5.63	0.02	0.00	0.23	0.07	1.80	0.05
34	多肥北原西	杯	74.39	0.97	15.59	7.14	0.02	0.00	0.14	0.00	1.76	0.04
35	多肥北原西	壺	77.58	1.00	14.13	6.34	0.01	0.00	0.15	0.10	1.75	0.03
36	多肥北原西	壺	78.01	0.82	15.63	4.08	0.01	0.00	0.45	0.16	2.76	0.03
37	多肥北原西	壺	69.72	1.01	16.16	8.95	0.02	0.00	0.29	0.11	1.77	0.03
38	多肥北原	皿	69.68	0.97	15.69	9.15	0.02	0.00	0.34	0.04	1.89	0.07
39	多肥北原	蓋	64.76	1.18	17.68	8.80	0.02	0.09	0.80	0.29	2.53	0.24
40	多肥北原	蓋	80.24	1.24	15.17	3.72	0.01	0.00	0.14	0.12	1.96	0.06
41	多肥北原	壺	71.43	0.87	15.08	8.55	0.02	0.00	0.30	0.11	2.14	0.04
42	多肥北原	蓋	81.29	0.84	14.35	3.75	0.01	0.00	0.45	0.10	2.13	0.04
43	多肥北原	杯	78.45	0.88	16.26	4.06	0.01	0.00	0.45	0.01	2.05	0.04
44	多肥北原	皿	74.78	0.76	18.64	3.66	0.01	0.00	0.30	0.17	2.92	0.04
45	西末園 V	蓋	71.84	1.09	17.32	6.75	0.02	0.00	0.32	0.16	1.80	0.03
46	西末園 V	蓋	71.50	1.01	15.54	8.74	0.01	0.00	0.16	0.00	1.74	0.02
47	西末園 V	蓋	70.67	1.02	16.24	0.38	0.02	0.00	0.30	0.08	2.06	0.04
48	西末園 V	杯	76.30	0.98	14.47	6.01	0.02	0.00	0.43	0.17	2.27	0.03
49	西末園 V	杯	71.04	0.97	15.62	8.35	0.02	0.00	0.28	0.16	2.02	0.03
50	西末園 V	杯	71.78	1.05	16.98	6.74	0.01	0.00	0.35	0.16	2.08	0.04
51	西末園 V	杯	69.90	1.02	16.68	8.30	0.02	0.00	0.28	0.15	1.74	0.03
52	西末園 V	杯	79.39	1.10	13.67	5.87	0.01	0.00	0.11	0.03	1.50	0.04
53	西末園 V	皿	75.83	1.09	15.83	6.15	0.01	0.00	0.11	0.06	1.51	0.04



1～16：讃岐国府、17～25：多肥松林遺跡、26～37：多肥北原西遺跡、  
38～44：多肥北原遺跡、45～53：西末刺遺跡

第6図 産地推定をした須恵器

蔵本 晋司

## 1. はじめに

筆者は、令和元年度に県内遺跡調査業務を担当した。その担当時に、香川県警察より丸亀警察署龍川駐在所の建物が老朽化し、本年度に建て替え工事を実施する予定である旨の連絡があった。龍川駐在所は、普通寺市原田町1024-6番地に所在し、周辺の香川県教育委員会や普通寺市教育委員会による発掘調査等により、周知の埋蔵文化財包蔵地である五条遺跡の範囲に含まれる可能性が高い場所に位置していた。そこで、香川県警察本部会計課と協議を行ない、建て替え工事の前に試掘調査を実施し、遺構を確認され、現地の保存が困難な場合には、本発掘調査を実施することで合意した。調査は、調査員1名と発掘作業員1名を雇用し、重機は建て替え工事の業者が使用していたものを、香川県警察の了解を得て借用した。

今回の調査地は、平成5年度と平成11年度に香川県教育委員会が実施した、県道府中普通寺線改良事業に伴う調査地（森下1994・塩崎2000）の北側隣接地である。また、東側には、平成27年度の普通寺市教育委員会による民間開発に伴う調査地（松浦2017）が位置する（第9図）。

令和元年10月7日～9日において、2本のトレンチを設定し試掘調査を実施した。官舎部分に設定したトレンチ2では、柱穴や土坑等の遺構を確認した。後述するように各遺構の掘り下げは行っておらず、時期を判断する根拠が欠け、遺構埋土は後述するSD01と近似する黒褐色粘土で充填され、SD01と時期的に近接することが考えられる。一部擾乱を蒙っているものの、五条遺跡の集落域が良好に残存していることを確認した。また、浄化槽部分のトレンチ1では、平成5年度調査区の大溝2、平成12年度調査区の大溝、平成27年度調査区のSD014と一連の遺構である溝SD01を検出し、五条遺跡の環濠の一部と判断された。環濠は、現地表下約1mの位置で検出され、それは浄化槽の掘削深度より浅く、遺構の保存が

困難であることから、香川県教育委員会生涯学習文化財課と協議の上、急速浄化槽部分について本発掘調査に切り替え、試掘調査の期間内において調査を実施することとした。なお、官舎部分については、遺構面と設計上の建物基礎との間に0.5m以上の保護層が確保できることから、試掘調査のみで調査を終了した（第2図）。

遺構平面図は、平板測量により縮尺1/100で作成し、駐在所の敷地境界を図化して、全体図に落とし込んだ。断面図は、縮尺1/20で実測した。

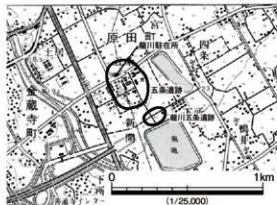
遺物は、浄化槽部分の調査で出土した、28ℓ入りコンテナ5箱の土器や石器が出土した。

今回の調査については、既に香川県教育委員会2021において概要を報告していたが、出土物については未報告であった。今回、調査内容の詳細を提示し、調査担当としての責を果たすこととした。

## 2. 五条遺跡

五条遺跡は、丸亀平野中央部、金倉川東岸の完新世段丘面上に立地する弥生時代前期後葉を中心とした環濠集落である。これまでの調査により、南北約260m、東西約200mの集落域が想定されている。森下英治等による旧地形復元図（森下1994・塩崎2000）によれば、金倉川旧流路に縁取られた紡錘形の微高地上に所在する。南縁を限る東西方向の旧流路を挟んで、南に時期的に先行する弥生時代前期中葉の環濠集落である龍川五条遺跡が所在する。今回の調査地は、五条遺跡推定範囲の北西隅付近に相当する（第1図）。

五条遺跡は、昭和34年（1959）に旧普通寺第二高等学校（現普通寺第一高等学校）竜川分校の隣接地で、農具舎を建設する際に多数の土器が出土したことから周知された遺跡である。その後、香川県教育委員会や普通寺市教育委員会により、公共事業や民間開発に伴い複数回の調査が行



第1図 遺跡位置図

なわれてきた。これまで小規模な調査が多く、遺跡の全体像の把握にまでは至っていないが、集落の経営期間等、明らかとなった点も多い。今後も、調査が積み重ねられていく中で、遺跡の詳細が明らかとなり、丸亀平野の弥生前期社会における本遺跡の意義が明らかにされることが期待される。なお、これまでの調査の概要については、海邊 2012b に詳述されており、ここでは省略し、調査成果の詳細については、後掲各報告書等を参照されたい。

### 3. 調査の成果

トレンチ1では、現地表下0.9mは現駐在所建設時の盛土層が堆積し、その下で一部層厚5cm程度の盛在所建設前の旧耕作土層を確認した。これら盛土層と耕作土層の下位で、上述したように溝SD01の埋土を検出した。

当初、SD01の上面まで重機により掘削し、以下を人力により掘り下げて調査を行っていた。しかし、想定以上に遺構が深く、埋土は硬くしまり容易に掘り下げるのが困難であったことから、調査期間を考慮して、上層の一部の掘り下げを残した段階より、重機により遺物を取り上げながら慎重に掘り下げを行った。したがって、上層出土とした資料に下層に帰属するものが含まれることになった点は留意する。

SD01の埋土は4層に細分され、上下2層に大別する。上層(第2図3層)は黒褐色粘土、下層(同図4～6層)はベース層ブロック土を含む灰色～褐色粘土である。両層はいずれも水平堆積を基調とし、下層はブロック土を含むことから人為的な埋戻し土、上層は埋戻し後の溝上面に生じた窪地を埋める自然堆積層と考えられる。遺物は、上層を中心に出土し、下層からは少量の土器等が出土した。

ここで、下層下位の5・6層について、記述しておく。いずれも4層下面で検出し、ベース層を溝状に掘り込む堆積層である。南側の5層は、検出面幅約0.4m、残存深0.18m前後、北側の6層は、検出面幅1m以上、残存深約0.2mで、両溝はほぼ並走して、環濠と同じ南西から北東に走行して検出された。そして、4層とは色調や混入するブロック土の量が大きく相違することから、異なる時期の堆積層であり、3・4層の環濠に先行する溝の可能性を、香川県教育委員会2021で指摘した。しかし、平成5年度調査区大溝1や平成25年度調査区SD014に、該当する先行溝は確認されていない点や、後述するように6層出土資料と3・4層出土資料に、大きな時期差が認められないことから、本層も4層に連続する堆積層と理解し、以下報告する。隣接地でもより良好な資料の出土を待って、検証することとした。

なお、SD01埋土のうち、上層は平成5年度調査区大溝1の中層に、下層は同下層に、色調や土質からそれぞれ相当することが考えられ、それは遺物の出土状況とも整合的である。

出土した遺物は第3～8図に示した。すべてSD01出土資料で、1～19、21～42、44～54、56～78が上層(3層)、43・55が下層(4層)、20が下層(6層)出土である。

1～5は壺の口縁部片である。1は小形の壺で、内傾する頸部より緩やかに折り返して小さな口縁部を成形する。2は、外傾して開く頸部より、口縁部は鈍く屈曲して短く開く。端部にヘラ描沈線を1条施す。3は緩やかに外反して開く口縁部を有し、端部は小さく下方へ拡張して、内傾する端部をなす。4も、端部に1条の沈線を施す。5は、頸部に無刻みの突帯を3条貼付する。6～9は壺の胴部片。6は最大径付近に3条の突帯を貼付し、やや大きめの刻み目を加える。7は突帯1条を貼付する。8は、低い刻み目突帯2条を貼付し、その上位に6条の櫛描直線文で飾る。9は、3条の刻み目突帯を貼付する。

10～17・30は、器表面のハクリ等が顕著な10・14～16等を含め、無文の逆し字形口縁甕とした。12は、口縁部に厚さ5mm程度の矩形の粘土紐を貼付し、突出度は低い。

18・19・22～24・26～29は逆し字口縁甕である。18・19・22・24・29は、口縁部に刻み目を施し、18・22・24の胴部には半裁竹管状工具による多条のヘラ描沈線文を、19は8条以上の櫛描直線文、29は口縁部下に3～4条の櫛描直線文と間に山形文を加える。21も、櫛描直線文と間に山形文を配した胴部小片である。27は、多条の櫛描直線文とその下位に刺突文を施すが、器表面の剥落等により条数が不明である。28は、14条の櫛描直線文で裝飾する。20・25は、口縁部よりやや下がった位置に突帯を貼付して、下位に複数条のヘラ描沈線文を加える。

31は、如意形口縁の甕で、頸部に3条のヘラ描沈線文を施す。

32・33は、蓋の天井部の破片。いずれもツマミ部は円筒状に突出し、上面は窪む。34は蓋として図示したが、細片で内外面の調整も不明なため、別の器種となる可能性がある。胎土中に雲母細粒を含み、搬入資料の可能性が高い。

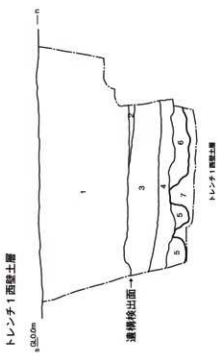
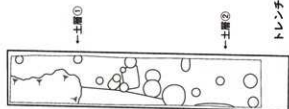
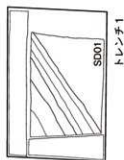
35は鉢として図化した。内面の器表面がハクリ・マメツして調整等が不明なため断定はできない。36は鉢である。口縁部は内外に拡張して、上面に平坦面をなす。

38～56は、壺または鉢の底部片であろう。37・38・54等の上げ底気味を呈するものと、56等のやや凸面状を呈するもの、その他多数の平底のものがある。53は、大形壺の底部片である。57・58は小型品で、鉢の底部となろう。59～71は甕の底部とした。38・58・63の胎土中には、雲母細粒を含み、搬入品の可能性が高い。

72は、ササカイト製の石錐である。基部の側縁稜線部は敲打により刃潰しを行い、先端部は折損する。73は、緑泥片岩製の磨製石庖丁である。紐掛け穴2孔を認める。表裏面に剥離痕と胛部に一部折損がみられ、その後も刃部を中心に研磨を行い再加工している。74はササカイト製品で、図左面の左側縁の一部に自然面を残す。また、図右面を中心に磨減痕が認められ、打弁等として使用した後破損のため、図左面の下及び右側縁に敲打を行い石核に転用した可能性もある。なお、下縁部は直線状を呈し、微細な剥離痕がみられることから、一時削器として使用された可能性がある。

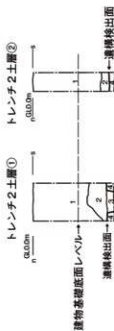
75・76は、いずれも砂岩の円礫を利用した叩





トレンチ1 高砂土層

- 1 調査・発土
- 2 田畑作土
- 3 1095/2 高砂質粘土 (Mn多、炭化物結晶化、土砂多量に含む、SD01 上層)
- 4 1095/1 高砂質粘土 (Mn多、炭化物結晶化、土砂多量に含む、SD01 下層)
- 5 MN 灰砂質土 (厚-20cm) ベース層(ロット土多量に含む、炭化物結晶化を含む、SD01 下層)
- 6 MN 灰砂質土 (厚-10cm) ベース層(ロット土多量に含む、炭化物結晶化を含む、SD01 下層)
- 7 2577/1 白田砂質土 (汚、ベーズ層)

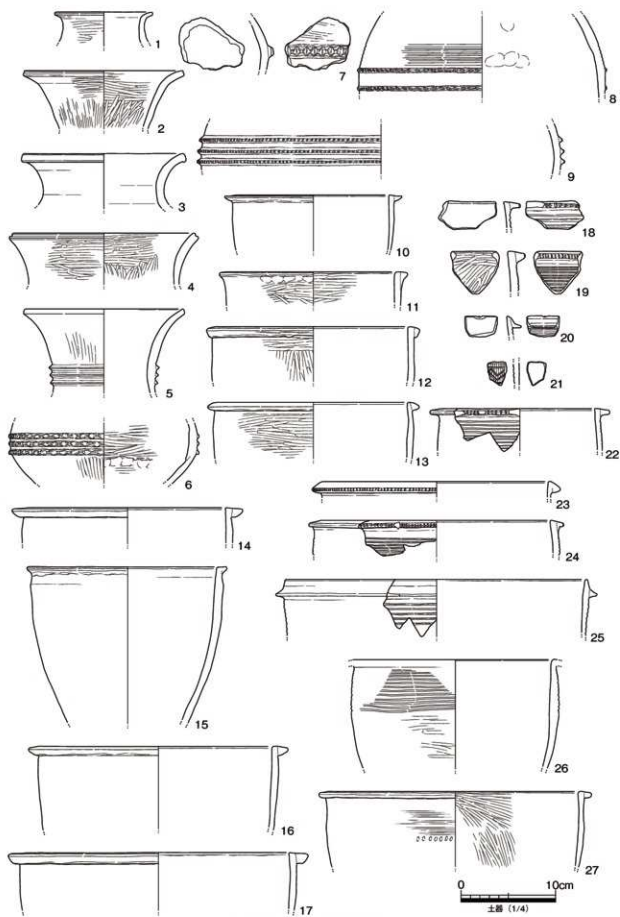


トレンチ2 高砂土層

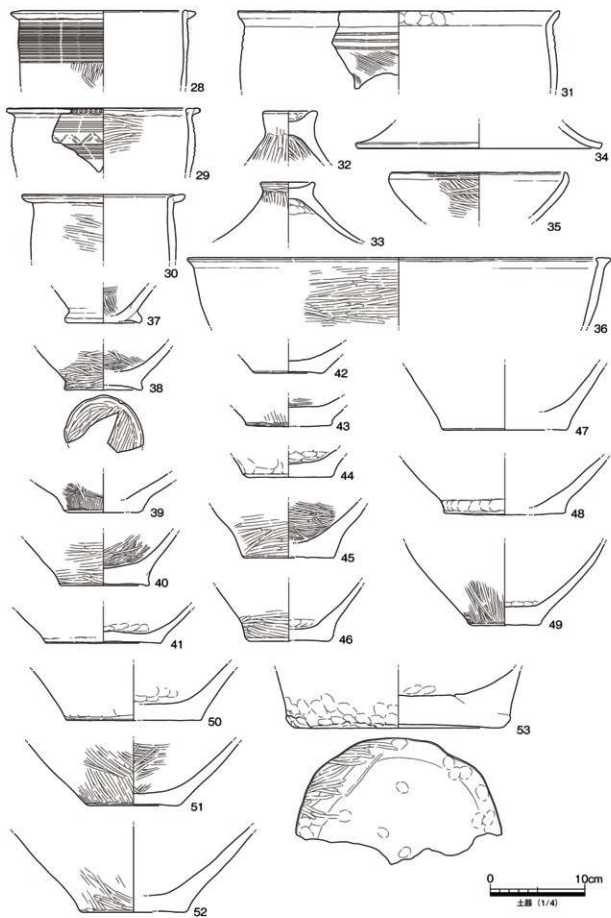
- 1 調査・発土
- 2 2577/1 灰白砂質土 (汚、田畑作土)
- 3 1095/1 高砂質粘土 (Mn、厚-3cm) ベース層(ロット土を含む、汚) 遺土)
- 4 2577/1 白田砂質土 (汚、ベーズ層)



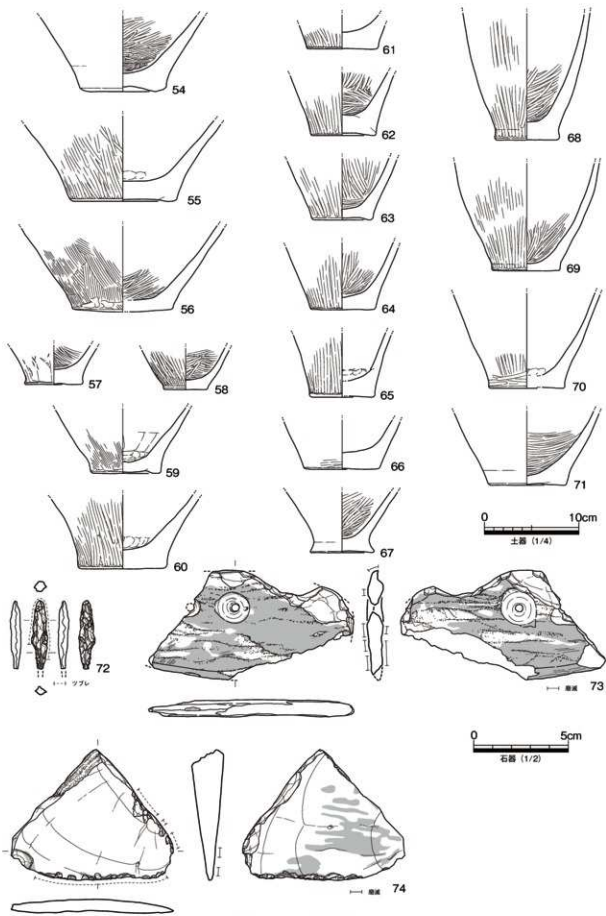
第2図 トレンチ1・2 平・断面図



第3图 出土文物实测图1



第4図 出土遺物実測図2



第5図 出土遺物実測図3



第6図 出土遺物実測図4

き石である。75は、周縁部を中心にアバタ状の敲打痕を認めるが、使用頻度は乏しい。76は、図左面広端面とその右側面を中心にアバタ状ないし線状の敲打痕を認める。77も、砂岩円礫を利用した叩き石で、図中央広端面と側面、上下小口面のそれぞれにアバタ状ないし線状の敲打痕が見られ

る。

78は、長さ約30cmの不定柱状を呈する砂岩亜円礫を利用した台石である。図中央の広端面と側面の2面に、線状ないしアバタ状の敲打痕を認める。また、同じ面を砥石として転用している。

上述したSD01出土資料は、これまでの調査に

より出土した資料と大きな相違は認められず、弥生時代前期後葉を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。また、下層出土資料は乏しく、詳細な時期を特定するには至らないが、上層とさほど大きな時期差を見積もることは困難と考えられる。

さて、ここで出土した土器の胎土に注目したい。土器の胎土は、肉眼及び5倍程度のルーペを用いて観察し、有色鉱物等が確認された資料については、～200倍の実体顕微鏡で観察を行った、含まれる岩石・鉱物粒には、花崗岩礫を含む細～中粒の石英・長石の円～角礫をベースに、安山岩か泥岩とみられる細粒の円礫や雲母等の有色鉱物、火山ガラスが認められた。観察表には、石英・長石の粒径・量と有色鉱物の有無を中心に記載した。石英・長石粒には、有意な差が認められなかったが、有色鉱物が含まれているのは、上述した通り僅かに4点のみであり、これらは搬入資料である可能性が高いと考えられる。

確認された有色鉱物の一つに、雲母粒がある。雲母は、珪長質岩に含まれるとされ、遺跡近辺でその岩石の分布を探索すると、多度津町から普通寺市に所在する天霧山や大麻山周辺の山頂～山麓部周辺に分布する流紋岩や花崗岩（産総研地質調査総合センターウェブサイト「地質図ナビ」がその候補となる。おそらく、それら山塊の山麓部に堆積した風化土が、土器製作に使用された可能性が高い。現状で、具体的な素地粘土採取地ないし製作地を絞り込むことは困難だが、おそらく上述した丸亀平野西縁部の山麓周縁の遺跡で製作された土器が、五条遺跡へ搬入された可能性は高いのではないと思われる。

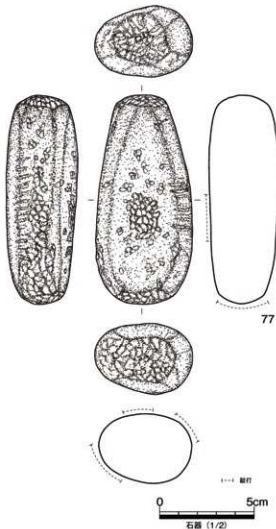
#### 4 突帯文系甕について

乗松・森下・信里 2000 では、龍川五条遺跡や観音寺市一の谷遺跡群等の突帯文系甕を示して、前期中葉には「前期初頭～前葉に比べ極端な減少傾向にある」点を指摘し、その特徴として、無文を主体とし、口縁部よりやや下がった位置に細身の突帯を貼り付け、端部に施される刻み目は細く小さなもので、「遠賀川系の如意形口縁甕の刻目と変わらない」とした。

乗松・森下・信里 2000 では、逆L字形口縁甕と突帯文系甕の系譜関係に焦点が絞られているため、突帯文系甕のその後の展開については明らかにされていない。

SD01からは、口縁部よりやや下がった位置に突帯を貼付する甕2点(20・25)が出土している。突帯貼付位置の属性のみからは、突帯文系甕に含まれようが、端部に刻み目は施さず、また突帯下にヘラ描沈線文を加える点に、前期中葉の突帯文系甕と大きな相違を認める。また、本遺跡の2点の甕の突帯貼付方法には、口縁部付近に粘土を貼付して、突帯上面を押圧して、突帯位置を見た目上端部よりやや押し下げた20と、突帯文系甕同様に、口縁部よりやや下がった位置に突帯を貼付する25の2者がある。

突帯端部に刻み目を欠き、突帯下に多条の沈線文を加える甕は、逆L字形口縁甕にあり、これら



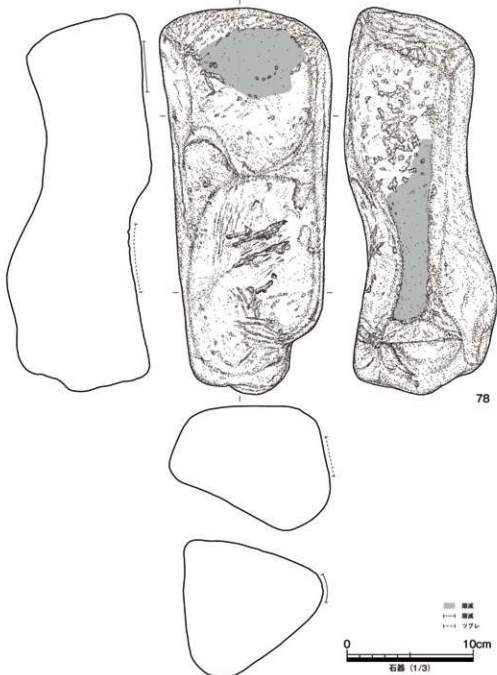
第7図 出土遺物実測図5

2点の甕は、突帯文系甕に逆L字形口縁甕の要素が取り込まれた、前期中葉の突帯文系甕に後出する器種として評価できよう。型式学的には20が逆L字形口縁甕により近いが、25との間の時間的な前後関係は不詳である。

同様の甕は、丸亀市佐古川・窪田遺跡周溝墓33（山元 2006）や高松市多肥宮尻遺跡SR02上層（木下・山元 2018）、同市北野遺跡SD24（乗松 2020）、さぬき市鴨部・川田遺跡SK1226（大久保・森下 2000）等の前期後葉から中期前葉の遺跡で少数ながら確認され、必ずしも特殊な存在ではなく、本地域の土器組成に取り込まれた形式と考えられよう。

#### 5 さいごに

今回の調査により、五条遺跡の環濠の一部が確認され、環濠内部の遺構の様相についても既往の成果を追究することができた。SD01は、これまでの調査により明らかにされていた内容とさほど大きな齟齬はみられず、より多くの資料が追加された。

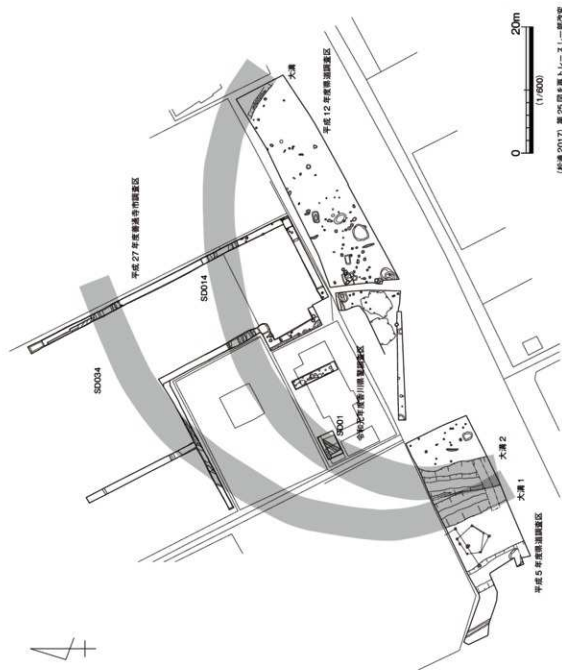


第8図 出土遺物実測図6

また、出土土器の中で、土器胎土より他地域より搬入された可能性がある資料が確認された点は、大きな成果であると考えられる。これまで、香川県下で弥生時代前期の土器の移動については、あまり注目されてこなかった。今回は、実体顕微鏡下での確認にとどまり、胎土分析を行っていないため、詳細な土器製作地については不詳ながら、丸亀平野西縁部の可能性を指摘した。検証は、今後の課題としておきたい。今後、当該期の既出土資料について再点検と胎土分析等を行い、各遺跡において搬入関係を整理し、地域間の交易等についても明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- 大久保徹也・森下友子 2000 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊 鴨部・川田遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会  
 海遺博史 2012a 『普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書13 石川首塚遺跡・五条遺跡・梶屋敷跡・夫婦岩1号墳』、普通寺市教育委員会  
 海遺博史 2012b 『五条遺跡発掘調査報告書-普通寺市立竜川小学校校舎増築等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』、普通寺市教育委員会



第9図 五条遺跡北部遺構配置図

香川県教育委員会 2021『埋蔵文化財試掘調査報告 32 令和元年度香川県内遺跡発掘調査』

木下清一・山元素子 2018『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻遺跡』, 香川県教育委員会  
 笹川龍一 1983『五条遺跡発掘調査報告書』, 善通寺市教育委員会

笹川龍一 1990『五条遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報』平成2年度, 香川県教育委員会

塩崎誠司 2000『五条遺跡Ⅱ-県道府中善通寺線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』, 香川県教育委員会

乗松真也・森下英治・信里芳紀 2000『讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅶ, 財団

法人香川県埋蔵文化財調査センター

乗松真也 2020『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 北野遺跡・鎌野西遺跡』, 香川県教育委員会

松浦暢昌 2017『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 17 五条遺跡・夫婦岩2号墳』, 善通寺市教育委員会

森下英治 1994『五条遺跡』『香川県埋蔵文化財発掘調査報告-平成5年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集-』, 香川県教育委員会

山元素子 2006『一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 佐古川・窪田遺跡』, 香川県教育委員会





調査番号	調査名	種別	時期	計測値 (cm)	調査		調査	位置	石工・瓦石	角四尺	調査	調査	備考
					調査	調査							
45	S101 3層	養生土壁	壁 or 床	190	断面	断面	10YR6.3に多い黄褐色	内層	石工・瓦石	角四尺	調査	調査	中・少
46	S101 3層	養生土壁	壁 or 床	183	断面	断面	2.5YR7.6黄褐色	N2 黒	断面	断面	調査	調査	中・少
47	S101 3層	養生土壁	壁 or 床	128	断面	断面	2.5YR6.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
48	S101 3層	養生土壁	壁 or 床	124	断面	断面	2.5YR5.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
49	S101 3層	養生土壁	壁 or 床	69	断面	断面	2.5YR7.3に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
50	S101 3層	養生土壁	壁	142	断面	断面	2.5YR7.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
51	S101 3層	養生土壁	壁	109	断面	断面	10YR7.3に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
52	S101 3層	養生土壁	壁	102	断面	断面	2.5YR7.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
53	S101 3層	養生土壁	壁	238	断面	断面	10YR6.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
54	S101 3層	養生土壁	壁	158	断面	断面	2.5YR7.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
55	S101 4層	養生土壁	壁	104	断面	断面	2.5YR6.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
56	S101 3層	養生土壁	壁	1102	断面	断面	2.5YR5.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
57	S101 3層	養生土壁	壁	58	断面	断面	10YR5.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
58	S101 3層	養生土壁	壁	44	断面	断面	2.5YR5.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
59	S101 3層	養生土壁	壁	170	断面	断面	N2 黒	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
60	S101 3層	養生土壁	壁	89	断面	断面	2.5YR4.6赤褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
61	S101 3層	養生土壁	壁	72	断面	断面	5YR4.6赤褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
62	S101 3層	養生土壁	壁	166	断面	断面	5YR4.6赤褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
63	S101 3層	養生土壁	壁	60	断面	断面	2.5YR5.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
64	S101 3層	養生土壁	壁	166	断面	断面	10YR2.4黒	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
65	S101 3層	養生土壁	壁	164	断面	断面	10YR5.3に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
66	S101 3層	養生土壁	壁	77	断面	断面	2.5YR5.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
67	S101 3層	養生土壁	壁	164	断面	断面	2.5YR7.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
68	S101 3層	養生土壁	壁	164	断面	断面	2.5YR6.6黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
69	S101 3層	養生土壁	壁	68	断面	断面	10YR6.4に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
70	S101 3層	養生土壁	壁	177	断面	断面	10YR4.3黒	断面	断面	断面	調査	調査	中・少
71	S101 3層	養生土壁	壁	77	断面	断面	10YR7.3に多い黄褐色	断面	断面	断面	調査	調査	中・少

表2 出土器観察表2

調査番号	調査名	種別	時期	計測値 (cm)		調査	調査	調査	調査	調査	備考
				長さ	幅						
72	S101 3層	石鏡	石鏡	5.66	0.81	1.54	中・少	石鏡	断面	断面	調査
73	S101 3層	石鏡	石鏡	5.09	10.95	0.79	27.67	断面	断面	断面	調査
74	S101 3層	石鏡	石鏡	6.82	8.46	1.57	69.38	断面	断面	断面	調査
75	S101 3層	明石石	明石石	7.74	7.29	3.44	253.80	断面	断面	断面	調査
76	S101 3層	明石石	明石石	9.64	8.77	5.19	696.30	断面	断面	断面	調査
77	S101 3層	明石石	明石石	10.97	5.02	3.76	397.51	断面	断面	断面	調査
78	S101 3層	石鏡	石鏡	30.7	13.7	10.7	690	断面	断面	断面	調査

表2 出土石器・石製品観察表



写真1 調査地近景 (南東より)



写真2 SD01 上面検出状況 (東より)



写真3 SD01 完掘状況 (東より)



写真4 SD01 土層 (東より)



写真5 SD01 土層細部 (東より)



写真6 2トレンチ全形 (南より)



写真7 2トレンチ土層① (西より)



写真8 2トレンチ土層② (西より)

香川県埋蔵文化財センター年報  
令和3年度  
香川県埋蔵文化財センター研究紀要X

2023（令和5）年 1月27日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024

香川県坂出市府中町南谷5001番地4

電話 (0877) 48 - 2191

FAX (0877) 48 - 3249

印刷 ワールド印刷株式会社